

小島・柳原遺跡群

水内坐一元神社遺跡II

——(株)山二 小島宅地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1997・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともに「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

歴史は単なる時間の流れの集積ではなく、私たちの先祖の長い間の智恵と文化の集積であります。特に埋蔵文化財は先人たちの文化を伝えるだけでなく、現代の文化の在り方を見つめ直すうえでも鍵となる貴重な国民の共有財産であります。

このたび、株式会社 山二 小島宅地開発事業に伴い、小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は、過去の調査で重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でもそれぞれ多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、「長野市の埋蔵文化財」第82集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成9年3月

長野市教育委員会教育長 滝澤忠男

例 言

- 1 本書は、株式会社 山二 小島宅地造成事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、株式会社 山二の委託を受けて、長野市教育委員会が実施した。
- 3 調査地は長野市大字小島字岡田堰南484-1 他に位置するが、周知の小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡の範囲内と理解できるため、水内坐一元神社遺跡として報告するが、正式な遺跡名称については、将来的な検討にゆだねたい。
- 4 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。
- 5 本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。資料掲載の要領は下記の通りである。

- ・資料は検出されたものの中から、時期の明確に把握し得るものを中心に掲載した。ただし特殊なものはこの限りではない。時期・性格等不明瞭なものは資料掲載の対象からはずしたが、これらに関しては図面・出土遺物等閲覧し得るように保管してある。

- ・遺構番号は出土遺物等検索の都合上から、調査時に用いた仮番号をそのまま使用している。

- ・遺構の測量は、株式会社 写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に1：80の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。

- ・遺物実測図に関しては基本的に土器1：4、土器拓影1：3に統一してあるが、その他のものについては、適宜縮尺を明記してある。

- ・土器実測図の内、弥生時代の赤彩品・古墳時代の黒色処理はスクリーンで表現してある。

- ・出土土器観察表の記載は次の要領で行った。

番号：図版番号と一致する。

法量：実際の計測値ならびに推定復元による計測値を記した。

遺存度：図示した部分の遺存度を記した。

胎土：明らかに在地の胎土と異なるものに○印をしてある。

第1章 調査経過

第1節 調査にいたる経過

長野市小島・柳原地籍は市域の北東端に位置し、地形的には千曲川によって形成された自然堤防と千曲川の氾濫原に大きく区分されよう。今回の調査地周辺は自然堤防上に位置するものと考えられ、調査地北側には畑や水田が広範に展開する。また南側は、旧来からの集落の外延に新興の住宅地が急速に広まりつつある。

平成8年8月、株式会社山二は長野市大字小島字岡田堰南484-1他5筆の地籍に、総面積2,934㎡・11区画に及ぶ宅地造成を計画した。

事業予定地は周知の「小島・柳原遺跡群」の範囲内に位置し、また、予定地北方500mほどの地点で「柳原市民体育館建設事業」に伴う発掘調査で弥生時代の環濠集落を調査中でもあり、当然遺跡範囲に包含される可能性が高いものと判断された。

このため長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）では株式会社山二の委託を受け、事前に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施することになった。

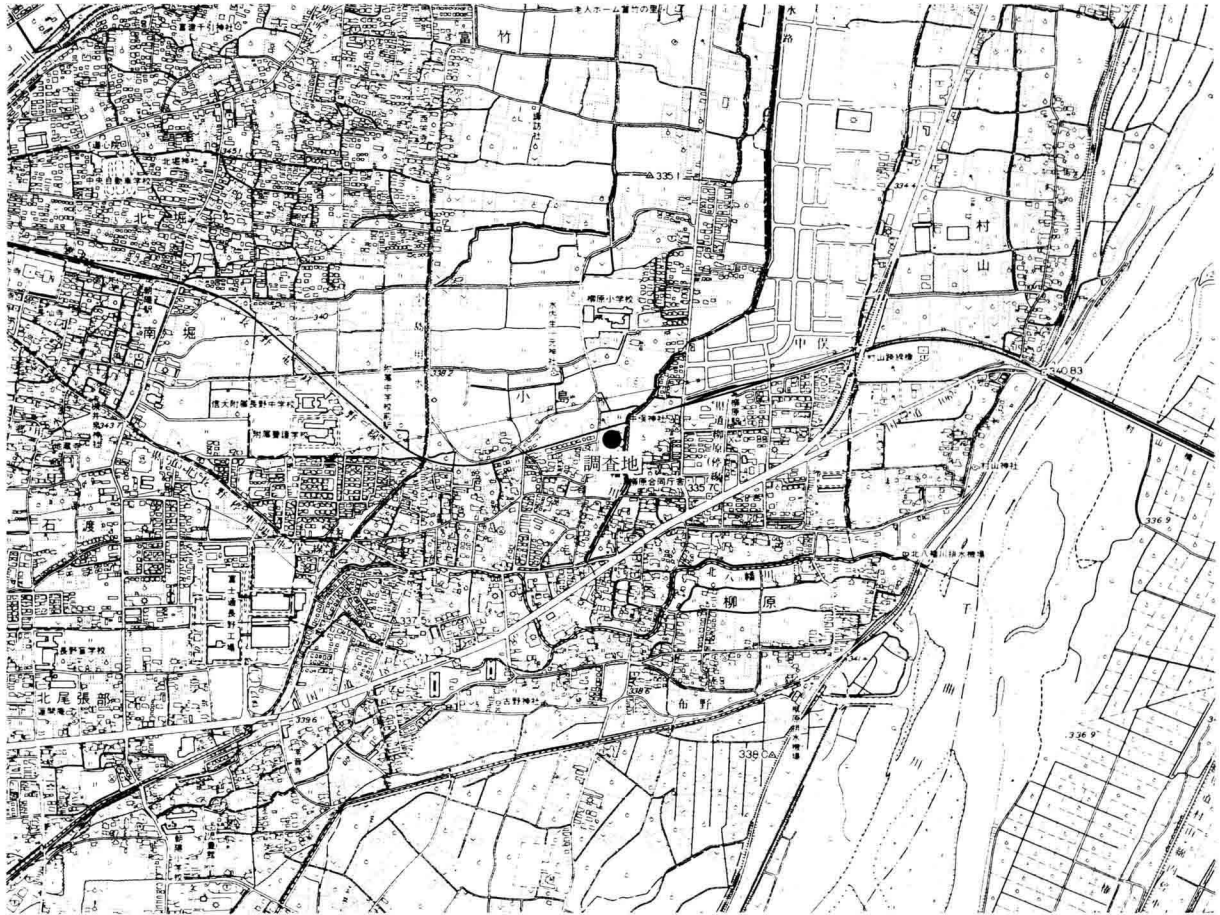
試掘調査は事業予定地内の任意の地点2か所について実施した。両地点における土層堆積状況はおおむね一致し、現地表下50cm内外に存在する黒褐色粘質土層が弥生時代後期後半～終末期の遺物包含層と判断された。

この結果より、事業面積2,943㎡中、掘削等の工程により埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性の高い道路造成部分約340㎡について、記録保存を前提とした発掘調査の必要性が確認されることとなった。

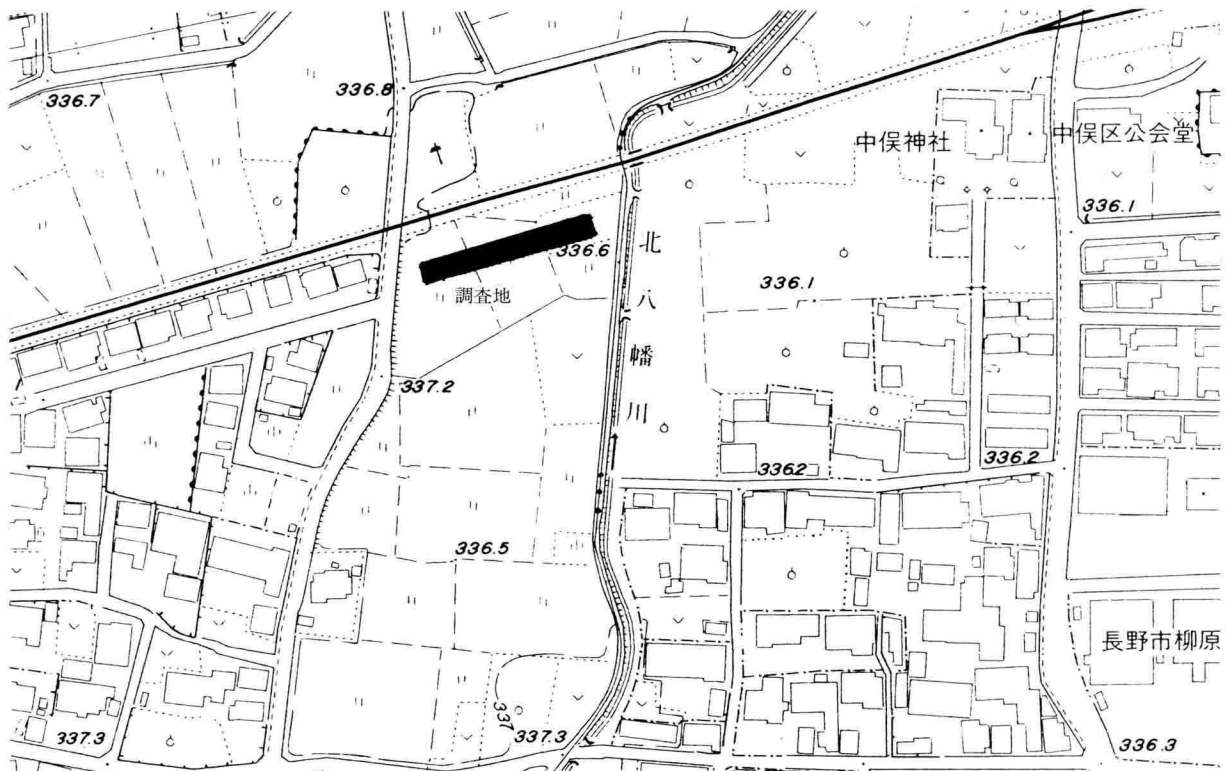
本調査は平成8年8月19日より開始し、9月6日まで実質13日間にわたって実施し、その後継続的に整理作業を実施し、本書の刊行に至った。

第2節 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会教育長	滝澤 忠男		
総括責任者	長野市埋蔵文化財センター所長	丸田 修三		
庶務係	〃	所長補佐 小林 重夫	調査係	長野市埋蔵文化財センター専門員 堀内 健次
	〃	職員 青木 厚子		〃 専門員 勝田 智紀
調査係	〃	所長補佐 矢口 忠良		〃 専門員 小林まゆ佳
	〃	主査 青木 和明		〃 専門員 宮川 明美
	〃	主査 千野 浩		
	〃	主事 飯島 哲也	調査参加者	
	〃	主事 風間 栄一		大和笑子 辰野正治 小林紀代美 鈴木友江 待井
	〃	主事 小林 和子		春子 清水七男 松尾よし子 中村忠彦 宮沢美代
	〃	専門主事 清水 武		子 中島芳江 清水かおる 関川幸子 宮沢つね子
	〃	専門員 中殿 章子		常田保子 奥村和子 滝沢歌子 丸山良子 村橋寿
	〃	専門員 山田美弥子		美男 坪井ふみ子 阿部正子
	〃	専門員 西沢 真弓		事業主体者である株式会社山二におかれては、埋
	〃	専門員 小野由美子		蔵文化財保護に対して深くご理解をいただき、絶大
	〃	専門員 藤田 隆之		なご協力を賜った。厚く御礼申しあげたい。



(1 : 20,000)



(1 : 2,500)

図1 調査地周辺の地形

第2章 調査地周辺の考古学的環境

長野市域犀川以北には、浅川扇状地遺跡群、裾花川扇状地遺跡群、小島・柳原遺跡群という大きな三つの遺跡群が存在する。小島・柳原遺跡群は千曲川左岸に形成された広大な自然堤防上に立地する遺跡群であり、前二者とはややその性格を異にする。以下、小島・柳原遺跡群の範囲内にて正式な調査を経た遺跡の概要を述べ、調査地周辺の考古学的環境とする

水内坐一元神社遺跡

第一次調査：長野市立柳原小学校校舎移転新築事業に伴い実施されたもので、弥生時代住居址4軒、古墳時代住居址5軒、平安時代柱穴群・溝址などが検出されている。弥生時代は中期後半と後期初頭の2時期、古墳時代は中期の遺構が検出されており、水内坐一元神社遺跡の北西端に位置するものと想定される。

(文献：長野市教委1980『三輪遺跡』長野市の埋蔵文化財第6集)

第二次調査：柳原市民体育館建設事業に伴い実施されたもので、約1,000㎡にわたる調査を行っている。弥生時代後期末の環濠集落の一部が検出された。環濠は部分的に二重にめぐらされており、内側のものは上幅平均4.50m、深さ1.80m、断面V字形をなすもので、外側のものは上幅8.50m、深さ1.20mで断面はゆるやかな逆台形状を呈する。二本の環濠にはさまれた部分は環濠掘削時の排土を盛り上げて土塁状に構築されていることが確認されている。環濠内部の居住域からは住居址が5軒検出されているが主軸等企画的に配置されており、また住居の重複もないことより環濠集落として機能した期間は比較的短かったものと想定される。環濠内より、木製盾、武器型木製品(槍)、弓、農耕具等の多量の木製品が出土している。

(文献：平成9年度報告書作成予定)

宮西遺跡

民間の宅地造成事業に伴い調査を実施したもので、弥生時代住居址11軒、古墳時代周溝墓2基、中世溝址等が検出されている。弥生時代住居址は、中期後半と後期後半の2時期のものが検出されている。水内坐一元神社遺跡第2次・3次調査の結果より考えれば、宮西遺跡として独立するものではなく、水内坐一元神社遺跡の一部として理解するのが妥当と判断されるが、詳細は将来的な検討にゆだねたい。弥生時代後期後半の住居跡は水内坐一元神社遺跡の環濠外に位置するものであり、この環濠集落の性格を考慮するうえで重要である。また古墳時代周溝墓は限定された調査範囲からはその形態は不明であるが、前方後方形もしくは方形を呈するものと想定され、環濠集落廃絶後の墓域の一端を示すものと理解し得る。溝址等中世遺構は検出例が少ないが、付近に存在する中世城館・中俣城跡との関係も考慮せねばならぬであろう。

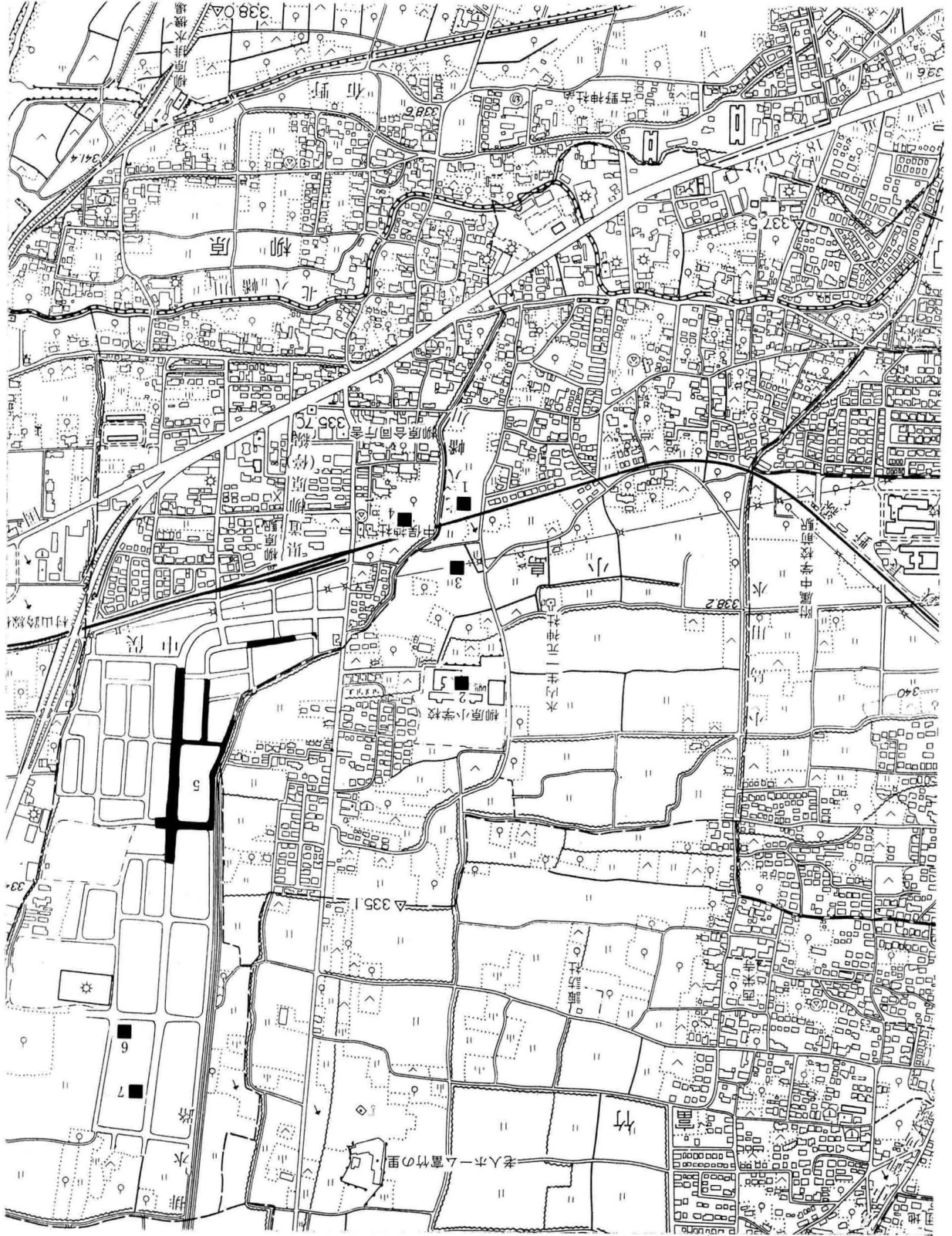
(文献：長野市教委1994『小島・柳原遺跡群 宮西遺跡』長野市の埋蔵文化財第64集)

中俣遺跡

第一次調査：長野市中俣土地区画整理事業に伴い、昭和63年度から平成2年度にかけて約5,000㎡にわたる発掘調査を実施した。想定される中俣遺跡の中央部に位置する。調査では弥生時代から古墳時代前期にかけての集落址が検出され、特に弥生時代中期後半の栗林式期の集落は規模も大きく、住居址19軒・土壇19基・溝址2条を検出している。小島・柳原遺跡群における弥生時代中期の中核的集落と想定される。また弥生時代終末～古墳時代初頭の環濠の一部と考えられる溝址が検出されており、水内坐一元神社遺跡の環濠集落との関連が注目される。

図2 周辺調査地点位置図 (1 : 10,000)

- 1 調査地
- 2~3 水内坐一元神社遺跡 (2 : 第一次調査地 3 : 第二次調査地)
- 4 宮西遺跡
- 5~7 中俣遺跡 (5 : 第一次調査地 6 : 第二次調査地 7 : 第三次調査地)



(文献：長野市教委1991『小島・柳原遺跡群 中俣遺跡 浅川扇状地遺跡群 押鐘遺跡 壇田遺跡』長野市の埋蔵文化財第41集)

第二次調査：長野中央消防署柳原分署移転新築事業に伴い約400㎡の調査を実施した。調査地は第一次調査地の北東に位置し、弥生時代後期・古墳時代後期の遺構を確認している。弥生時代中期の遺物も出土しているが、これに伴う遺構は確認されていない。古墳時代後期の住居址は、中俣遺跡・水内坐一元神社遺跡では確認されておらず、当該期の集落立地を考慮するうえで重要であろう。

(文献：長野市教委1992『小島・柳原遺跡群 中俣遺跡II』長野市の埋蔵文化財48集)

第三次調査：民間の事務所新築工事に伴い実施したもので、第二次調査地点の北側に位置する。弥生時代中期～古墳時代初頭の集落址を検出している。弥生時代中期後半は住居址4軒、土壙1基、弥生時代後期後半は住居址2軒、土壙5基、溝址10条、古墳時代初頭は方形周溝墓1基、溝址8条を確認している。弥生後期後半の集落廃絶後、古墳時代初頭に至って、墓域として利用される点、宮西遺跡と類似する様相が認められる。現状では中俣遺跡の北限を画する調査地点である。

(文献：長野市教委1996『浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡 小島・柳原遺跡群 中俣遺跡III』長野市の埋蔵文化財第76集)

小島境遺跡

弥生時代中期以降の各時代にわたる遺構が検出されており、古墳時代前期の周溝墓5基が検出されている。周溝墓と同時期の住居址群も検出されており、うち3軒から玉造生産関係の遺物が出土している。出土土器の様相には、北陸東部地方の影響が色濃く現れており、また東海系の土器群もこれに伴出しており、千曲川流域における古墳時代初頭の土器模様的一端を示す良好な資料と言える。

(文献：青木和明1984「小島境遺跡」『古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所他)

南川向遺跡

民間の宅地造成に伴い調査を実施したもので、小島・柳原遺跡群の南西端付近に位置し、平安期の集落が検出されている。特徴的な遺物としては、緑釉陶器皿が出土している。

(文献：長野市教委1988『小島・柳原遺跡群南川向遺跡』長野市の埋蔵文化財第25集)

上中島遺跡

民間の宅地造成に伴い調査を実施したもので、平安時代中期の住居址3軒・溝址2条ならびに時期不明ではあるが火葬骨埋葬墓1基が検出されている。南川向遺跡で検出された平安集落との関連が目される。火葬墓は曲げ物状の容器に火葬骨を埋納したものと判断される。

(文献：長野市教委1994『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡 小島・柳原遺跡群 上中島遺跡』長野市の埋蔵文化財第62集)

以上の、正式調査を経た小島・柳原遺跡群の各遺跡の概要について簡単にふれてきた。いまだ点と線の状況で、そのすべてを把握するには程遠い状況にあるが、水内坐一元神社遺跡や中俣遺跡に関しては、かなり具体的にその状況を把握しつつある。しかし、今後の調査事例の増加を待ち、遺跡群全体の構造について更なる検討が必要なことはいままでもない。

第3章 調査

第1節 調査概要

今回の調査は、民間の宅地開発事業に伴うものであり、基本的に盛り土造成される宅地部分を除き、工事によって直接埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性の高い、道路造成部分にのみ調査範囲を限定したために、その調査面積は約340㎡というきわめて限られたものとなった。

調査地の基本的な土層序は第1層が旧水田耕土（厚さ15cm）、第2層が淡灰褐色粘質土層（厚さ15cm）、第3層が遺物包含層である黒褐色粘質土層（厚さ20cm）、第4層が地山ととらえられる明黄褐色砂質粘土層であり、確認された遺構はすべて第3層中により掘り込まれており、検出は第4層上面にて行った。

検出された遺構は弥生時代住居址8軒・土壇11基、古墳時代前期住居址3軒、古墳時代中期溝址3条、時期不明住居址4軒?・土壇4基である。

弥生時代後期住居址で比較的内容が明確になったものには3・5・9・14・17号住居址があるが、17号と3号・5号住居址が重複するのみで、主軸は基本的に北西方向に取る点、きわめて画一的な様相が看取される。断片的な出土土器からはすべての遺構の時間的位置を明確に把握することは不可能であるが、弥生時代後期後半、むしろ終末に近い時期に形成された集落址であることがうかがわれる。出土土器中に北陸東部地方に起源を持つ外来系土器や、北陸地方からの影響下に著しく変容した在地系の土器が比較的少量に認められる点も時間的位置付けの傍証となろう。

古墳時代前期の住居址は3軒検出している。著しい湧水や調査範囲の狭さから住居構造を明確にし得たものはないが、2号住居址からは東海系土器群とともに、畿内系のタタキ整形甕の破片が出土しており、当該期における交流の一端を示す貴重な資料となろう。

古墳時代前期を過ぎると今回の調査地点ではもはや居住の痕跡は確認されない。水内坐一元神社遺跡の一般的な傾向である。その後再び居住域として利用されるのは平安時代に入ってからであろう。

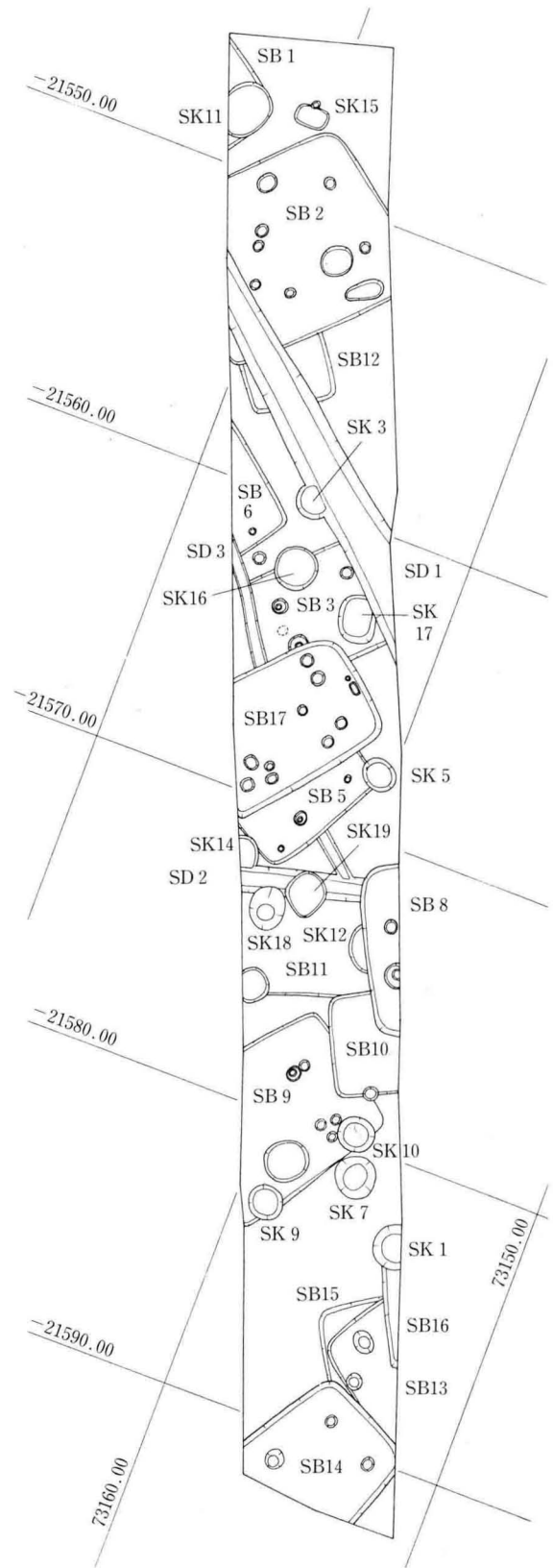


図3 調査区全測図 (1 : 250)

表1 検出遺構一覧表

遺跡名	時代	形態	規模	内部施設等	出土遺物等
1号住居址	弥生?	隅丸長方形	?	時期・規模等詳細不明	
2号住居址	古墳	隅丸方形	7.20×6.30	柱穴・柱痕	畿内系・東海系土器
3号住居址	弥生	隅丸長方形	4.60×4.00	主柱穴：4本長方形配置 地床炉	
5号住居址	弥生	隅丸長方形	4.88×2.00	柱穴	北陸系土器
6号住居址	弥生?	隅丸長方形	?	時期・規模等詳細不明	
8号住居址	弥生	隅丸長方形	?×4.60	柱穴	
9号住居址	弥生	隅丸長方形	6.40×5.40	柱穴	
10号住居址	?	隅丸方形	4.00×4.00	時期等詳細不明	
11号住居址	古墳	?	?	規模等詳細不明	
12号住居址	?	隅丸方形	3.00×3.00	時期等詳細不明	
13号住居址	古墳	隅丸方形?	?	規模等詳細不明 柱穴	東海系土器
14号住居址	弥生	隅丸長方形	?×4.40	主柱穴：4本長方形配置	北陸系土器
15号住居址	?	隅丸方形	?	時期・規模等詳細不明	
16号住居址	?	?	?	時期・規模等詳細不明	
17号住居址	弥生	隅丸長方形	6.20×4.20	主柱穴：4本長方形配置 出入口施設	
1号土壙	?	円形	径1.60	深さ1.40	
3号土壙	弥生	円形	径1.10	深さ0.30	
5号土壙	弥生	円形	径1.10	深さ0.40	
7号土壙	弥生	円形	径1.40	深さ1.40 二段にわたる掘り込みを有す	北陸系土器
8号土壙	弥生	円形	径1.50	深さ0.20	
9号土壙	?	円形	径1.10	深さ0.20	
10号土壙	弥生	円形	径1.40	深さ0.20	
11号土壙	弥生	長楕円形	2.00×1.60	深さ0.30	
12号土壙	弥生	長楕円形	2.50×2.00	深さ0.20	
14号土壙	弥生	円形	径1.20	深さ0.15	北陸系土器
15号土壙	?	隅丸方形	1.10×0.60	深さ0.15	
16号土壙	?	円形	径1.50	深さ0.50	
17号土壙	弥生	隅丸方形	1.60×1.30	深さ0.50	
18号土壙	弥生	円形	径1.60	深さ1.20 二段にわたる掘り込み有す	
19号土壙	弥生	隅丸方形	1.20×1.20	深さ0.20	
1号溝址	古墳			幅1.20～1.60 深さ0.30	
2号溝址	古墳			幅0.90 深さ0.20	
3号溝址	古墳			幅0.20 深さ0.20	

第2節 遺構と遺物

第1号住居址 (図3)

調査区東端にて検出されたもので、住居址南西隅の一部を検出したのみで大半が調査区外となる。また南西隅を11号土壇に切られる。規模等詳細は不明であるが、平面プランは隅丸長方形が予想される。確認面からの掘り込みは10cm前後と浅く床面も軟弱である。図示し得る遺物は出土していないが、弥生時代後期の住居址と想定される。

第2号住居址 (図4～6)

調査区東側にて検出されたもので北西と南西隅は調査区外となる。第12号住居址を切って構築されるが、1号溝址に切られる。

7.20×6.30mほどのやや大型の隅丸方形プランを呈するものと思われる。確認面からの掘り込みは平均35cm前後と深い。P₁～P₉の柱穴を検出しているが、すべてが本住居址に伴うものではなく、支柱穴配置も不明である。P₁には柱材が遺存していた。湧水が著しく床面の精査は十分ではないが、炉等そのほかの施設は確認されていない。出土土器には壺(1)、小形台付甕(2)、高坏(3～5)があるが、床面より出土したのは(3)のみで、他は覆土内か

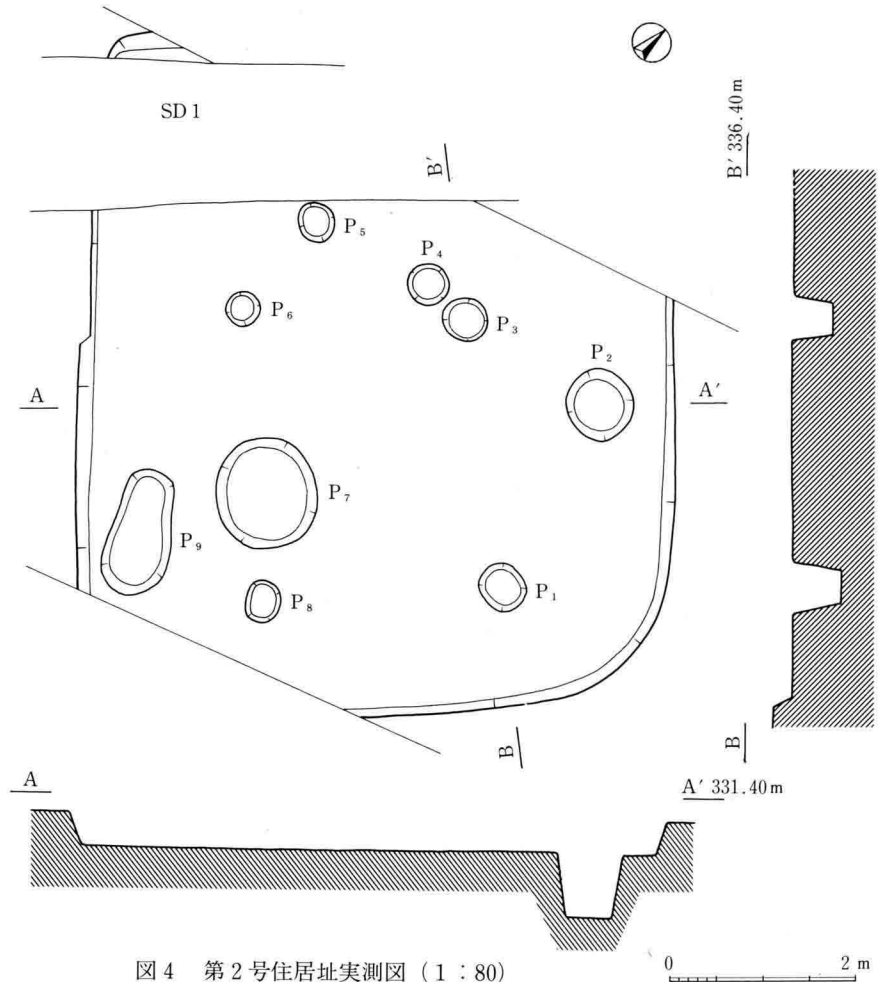


図4 第2号住居址実測図 (1:80)

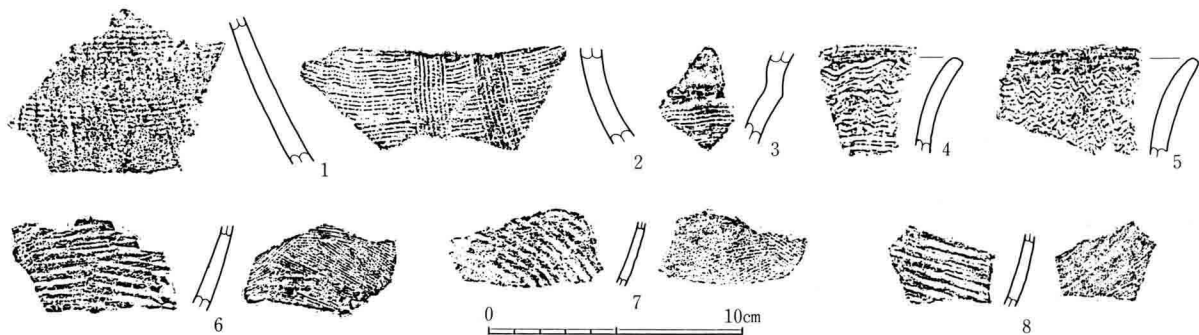


図5 第2号住居址出土土器拓影 (1:3)

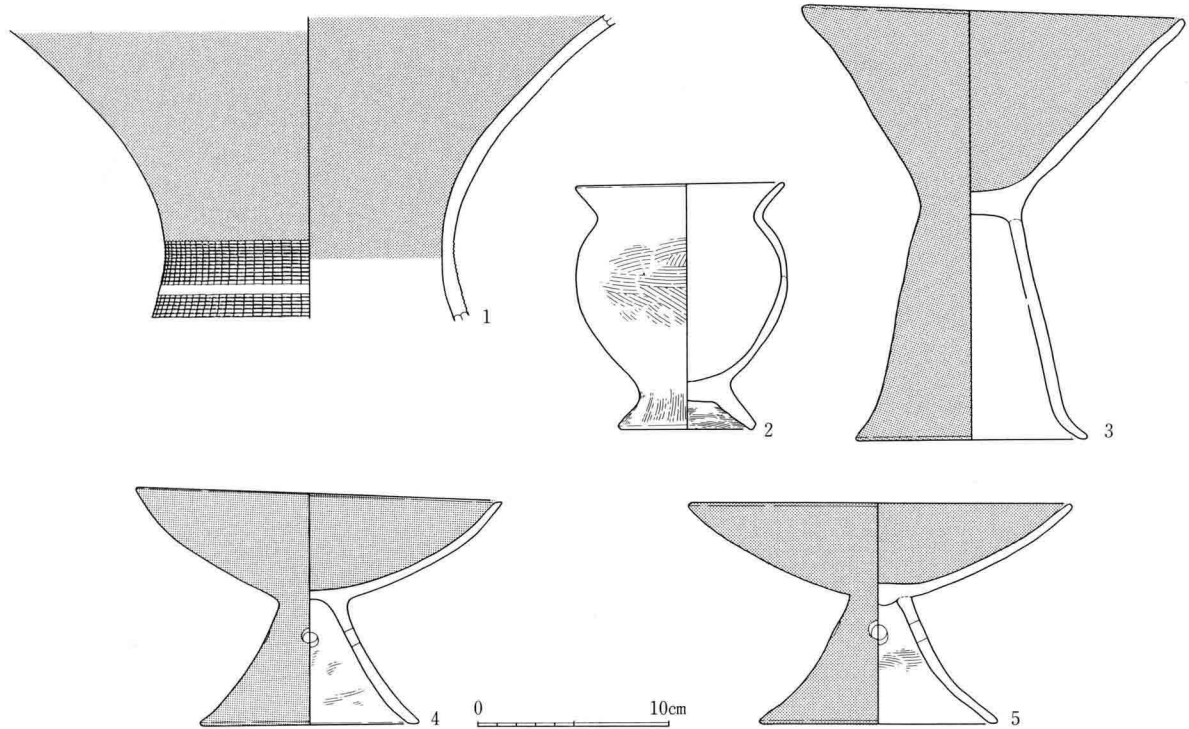


図6 第2号住居址出土土器実測図(1:4)

らの出土である。また拓影(6~8)は畿内形の叩き整形による甕型土器破片であり注目される。出土土器の様相より古墳時代初頭の住居址と考えられる。

第3号住居址(図7~8)

調査区中央付近にて検出された住居址で、北側は2号溝址に、南側は1号溝址に、北西を17号住居址に切られる。16・17号土壌とも切りあうが、その前後関係は不明である。

長軸長は不明であるが4.60×4.00mほどの隅丸長方形プランと想定される。確認面からの掘り込みは平均30cm前後である。

柱穴はP₁~P₃を確認しており、支柱穴は長軸2.60m、短軸1.60mの長方形配置と考えられる。

確認面からの掘り込みは平均20cm前後である。

床面は住居址中央付近を中心に比較的固く締まった状況であったが、壁際は軟弱である。

奥壁側柱穴間中央やや外側に地床炉が検出されている。床面からの掘り込みは3cm程で、底面は固く焼き締まっていた。出土土器には壺(1)、台付壺

(2)、甕(3~6)、高坏(7~9)があるが、7・9以外は床面より出土している。出土土器の様相よりすれば、弥生時代後期箱清水式期の住居址と考えられる。

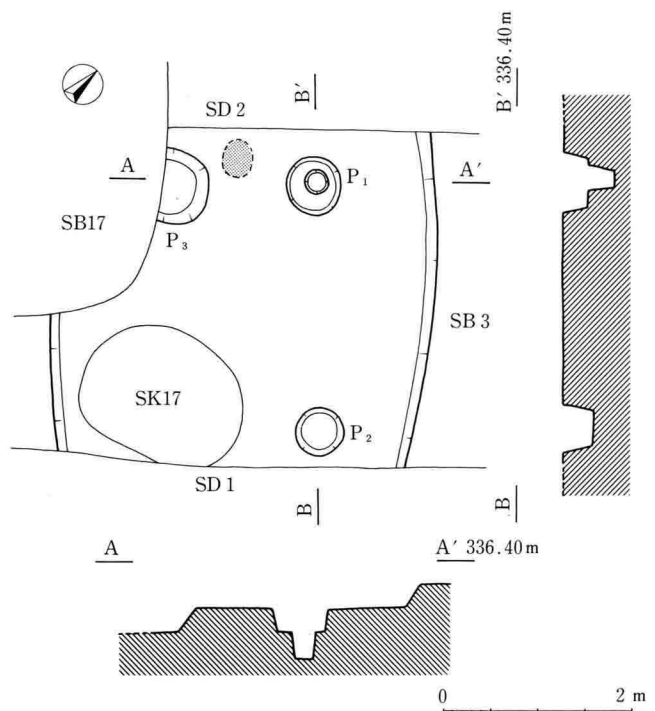


図7 第3号住居址実測図(1:80)

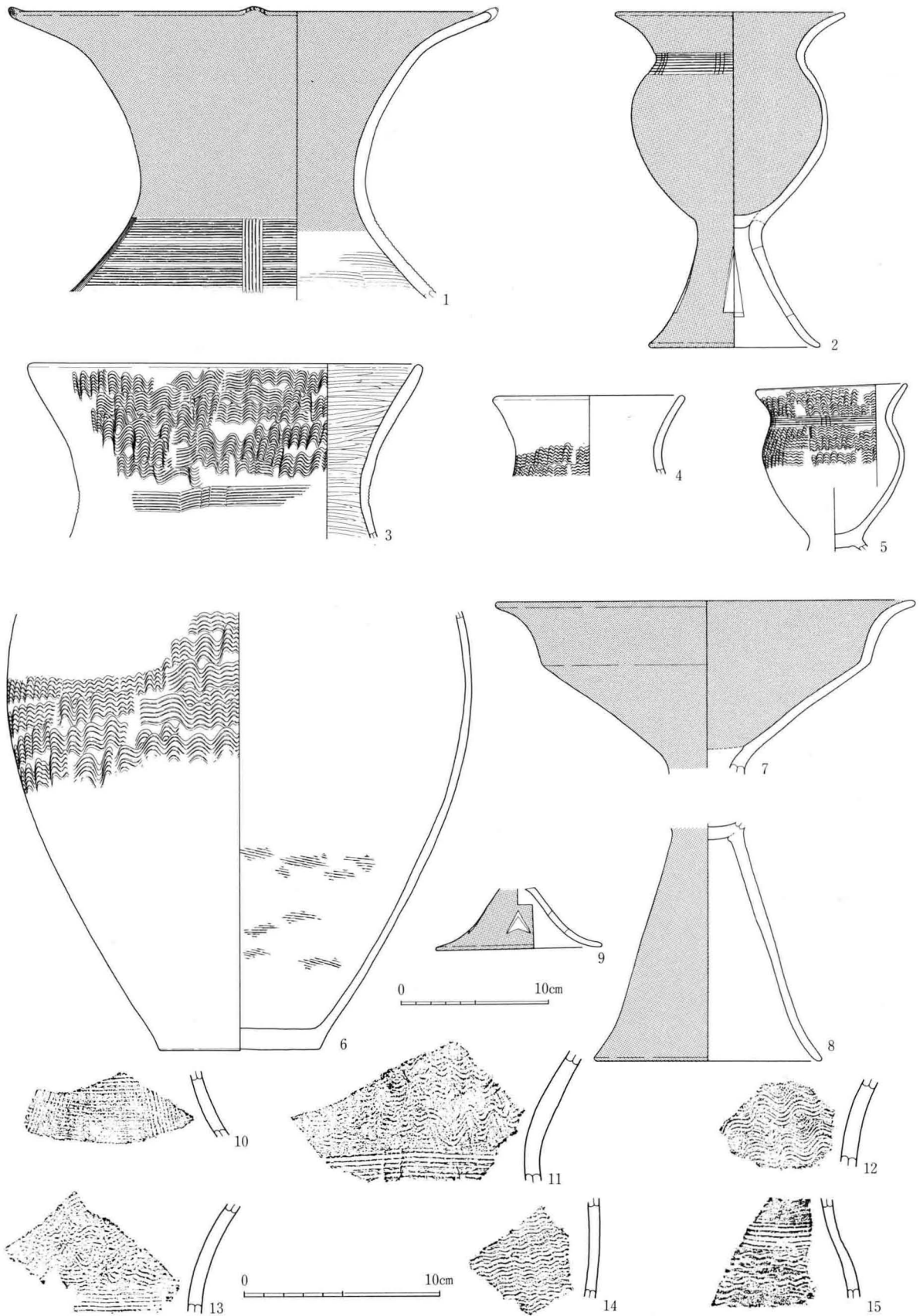


図8 第3号住居址出土土器実測図（1：4）ならびに出土土器拓影（1：3）

第5号住居址 (図9～10)

第17号住居址を切って構築されるが、検出時の不明瞭さから第17号住居址の調査を先行したために、東側1/2以上を破壊してしまった。また5号土壇・14号土壇とも切りあい関係にあるが、先後関係は不明である。上層は2号溝址に切られる。

平面プランは長軸4.88mほどの隅丸長方形と考えられ、短軸は2.00mほどと想定される。確認面からの掘り込みは平均20cm前後と浅い。

床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。柱穴はP₁・P₂が検出されている。4本長方形の主柱穴配置と想定される。炉等そのほかの施設は確認されていない。

出土土器のうち甕(6)は、口縁部から縦の羽状文を施文した後、頸部に簾状文を施文しており、佐久地方を中心とする千曲川上流域からの搬入品と考えられる。高坏(9)は北陸地方の影響下に在地のものが変容したものであろう。出土土器の様相より、弥生時代後期箱清水式期の住居址と考えられる。

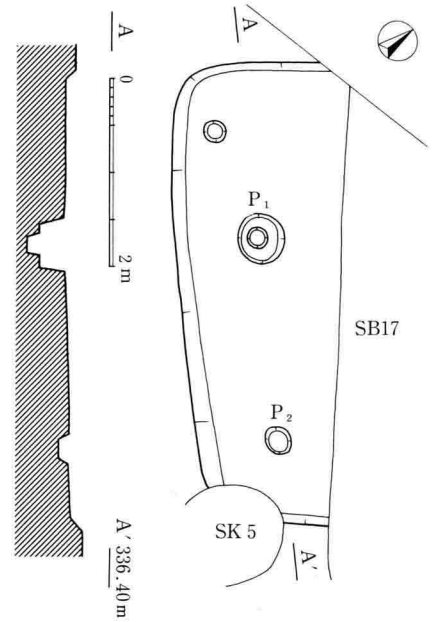


図9 第5号住居址実測図(1:80)

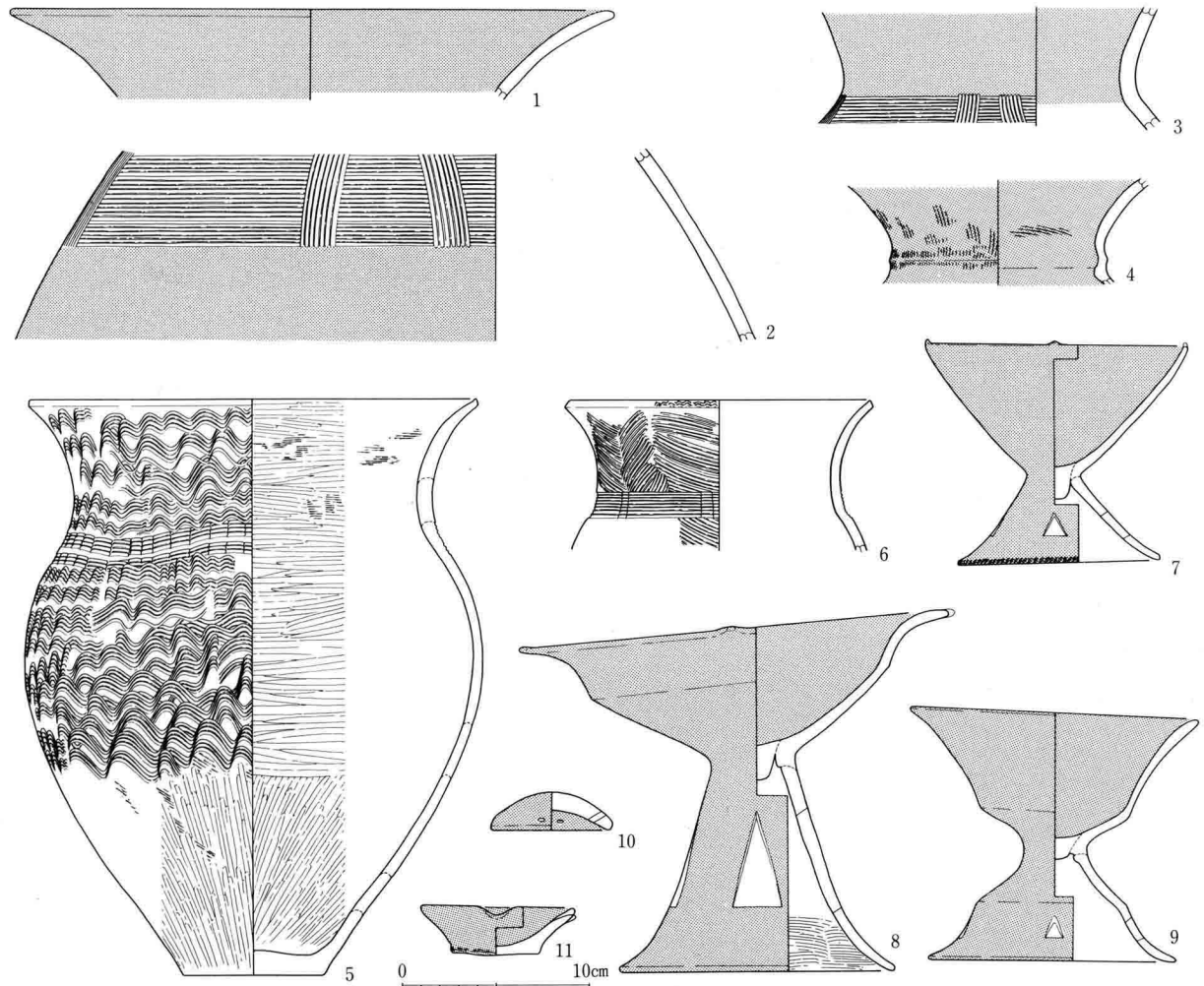


図10 第5号住居址出土土器実測図(1:4)

第6号住居址 (図3)

調査区東側で検出されたもので、大半が調査区外となる。また上層を2号溝址に切られる。規模等詳細は不明であるが、平面プランは隅丸長方形を呈するものと考えられる。確認面からの掘り込みは平均15cm前後と浅く、床面は全体に軟弱である。南西隅に柱穴を1個検出しているが、本遺構に直接伴うものか不明である。炉等そのほかの施設は確認していない。図示し得る出土遺物はないが、弥生時代後期箱清水式期の住居址と想定される。

第8号住居址 (図3・11)

調査区中央付近にて検出されたもので、南側は大半が調査区外となる。11号住居址・12号土壙・2号溝址に上層を切られる。10号住居址とも切りあい関係を有するが、切りあいの先後関係は不明である。

平面プランは短軸4.60mほどの隅丸長方形プランが予想される。確認面からの掘り込みは平均30cm前後と深い。

床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。柱穴は2本検出されているが、周辺に炉等の施設は存在せず、本遺構に直接伴うものか不明である。

覆土内より壺型土器胴部破片が出土している。出土土器の様相より、弥生時代後期箱清水式期の住居址と考えられる。

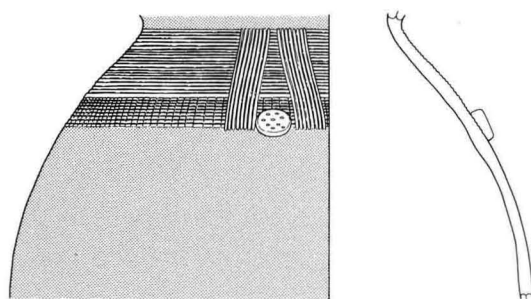


図11 第8号住居址出土土器実測図 (1:4)

第9号住居址 (図12・13)

調査区西側にて検出したもので、北側1/3程が調査区外となる。7号土壙に南西端を切られる。10号住居址・10号土壙とも切りあうが、切りあいの先後関係は不明である。

平面プランは短軸5.40m、長軸6.40mほどの隅丸長方形プランと想定される。確認面からの掘り込みは平均15cm前後と浅い。床面は住居址中央付近を中心にやや締まった状況であったが、全体に軟弱で不明瞭なものであった。柱穴はP₁~P₅を検出している。主柱穴はP₁・P₂と考えられ、掘り込みはともに90cm程としっかりしたものである。P₃・P₄は掘り込み規模も貧弱で、補助支柱的な性格も考えられる。

炉・出入口施設等その他の施設は確認されていない。

出土土器には壺(1・2)と甕(3)がある。壺(1)は覆土出土であるが外来系と考えられ、胎土も在地のものとは異質である。(2)・(3)は床面上よりつぶれた状況で出土している。

出土土器の様相より弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。

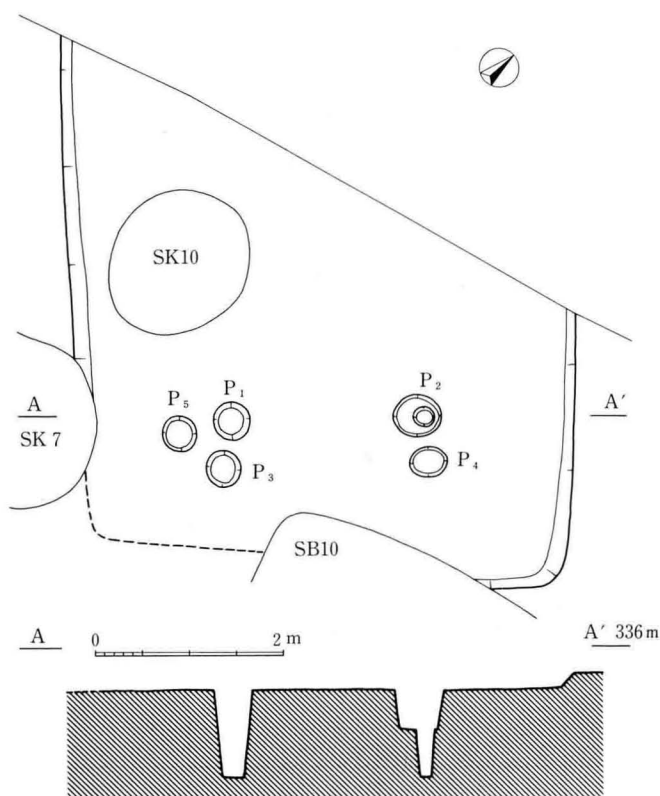


図12 第9号住居址実測図 (1:80)

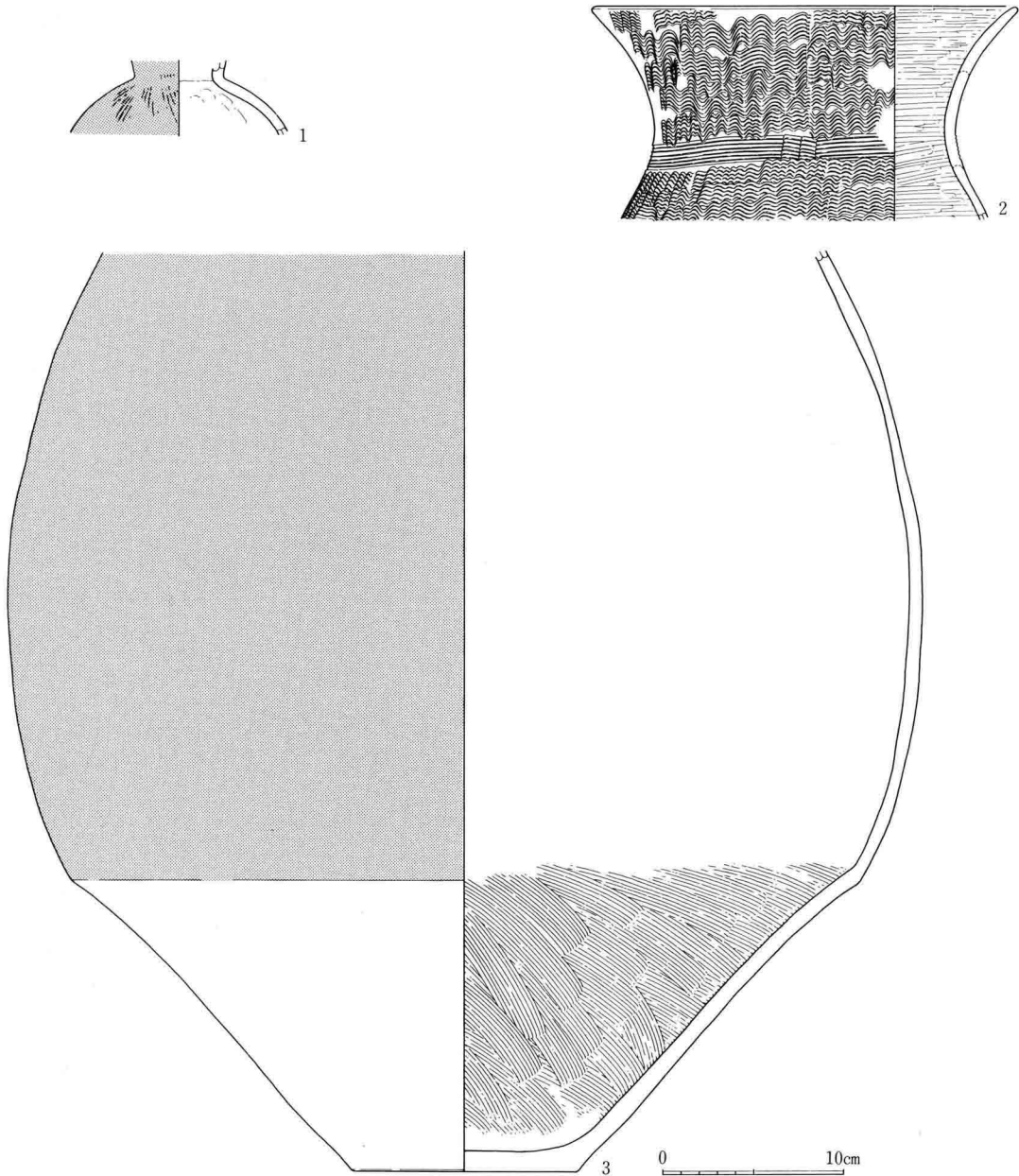


図13 第9号住居址出土土器実測図（1：4）

第10号住居址（図3）

調査区中央付近にて検出されたもので、南側1/2程が調査区外となる。8号・9号住居址と切りあうが、切りあいの先後関係は不明である。平面プランは一片4.00mほどの隅丸方形プランと想定される。確認面からの掘り込みは平均5cm前後と浅く、床面は全体に軟弱で不明瞭なものである。炉・柱穴等の諸施設は確認されておらず、本遺構を住居址とする積極的な根拠は存在しない。

明確に時期比定の根拠となる遺物も出土していない。

第11号住居址（図3・14）

調査区中央付近にて検出されたものであるが、他遺構との切りあい

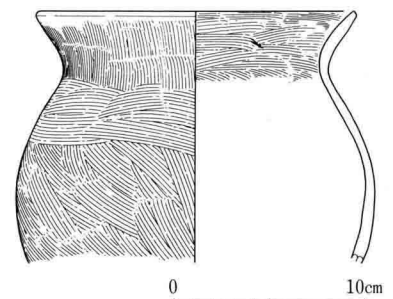


図14 第11号住居址出土土器実測図（1：4）

が激しく、床面と西壁の立ち上がりが確認されたのみで平面プラン等詳細は不明な部分が多い。8号・10号住居址、12号・18号・19号土壇を切るが、2号溝址に切られる。確認面からの掘り込みは平均10cm前後と浅く、床面は全体に軟弱である。本遺構に直接伴うと考えられる諸施設は確認されていない。

覆土内より図14に示した台付甕型土器が出土している。外面は全体にハケ整形されるもので、外来系と考えられ、胎土も在地のものとは異質である。

第13号住居址 (図15・16)

調査区西端にて検出された住居址で、14号・15号住居址を切って構築されている。南側は大半が調査区外となり、住居址北東隅の一部を検出したに過ぎない。

確認面からの掘り込みは平均20cm前後である。床面は全体に固く締まっており、明瞭なものであった。

北東隅に柱穴を1個検出している。50cmほどの掘り込みを有し、しっかりしたものであるが本住居に直接伴うものか不明である。

覆土内より壺(1~3)、甕(4~10)が出土している。外来系土器が主体を占める点、特徴的である。

出土土器より古墳時代前期の所産と考えられる。

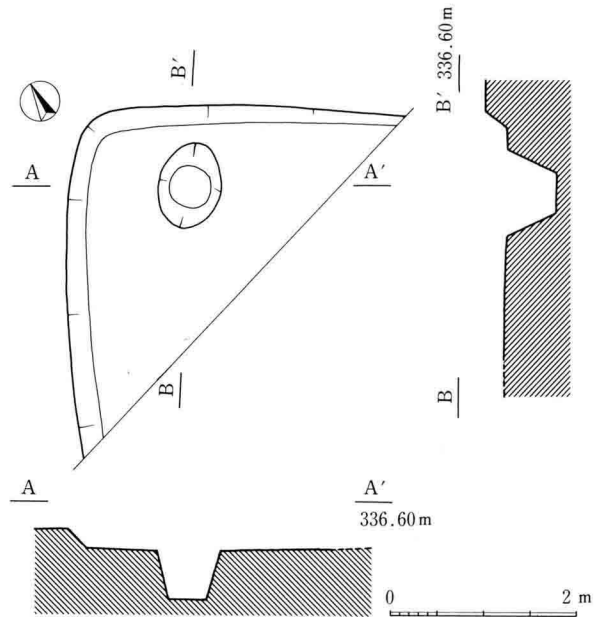


図15 第13号住居址実測図 (1 : 80)

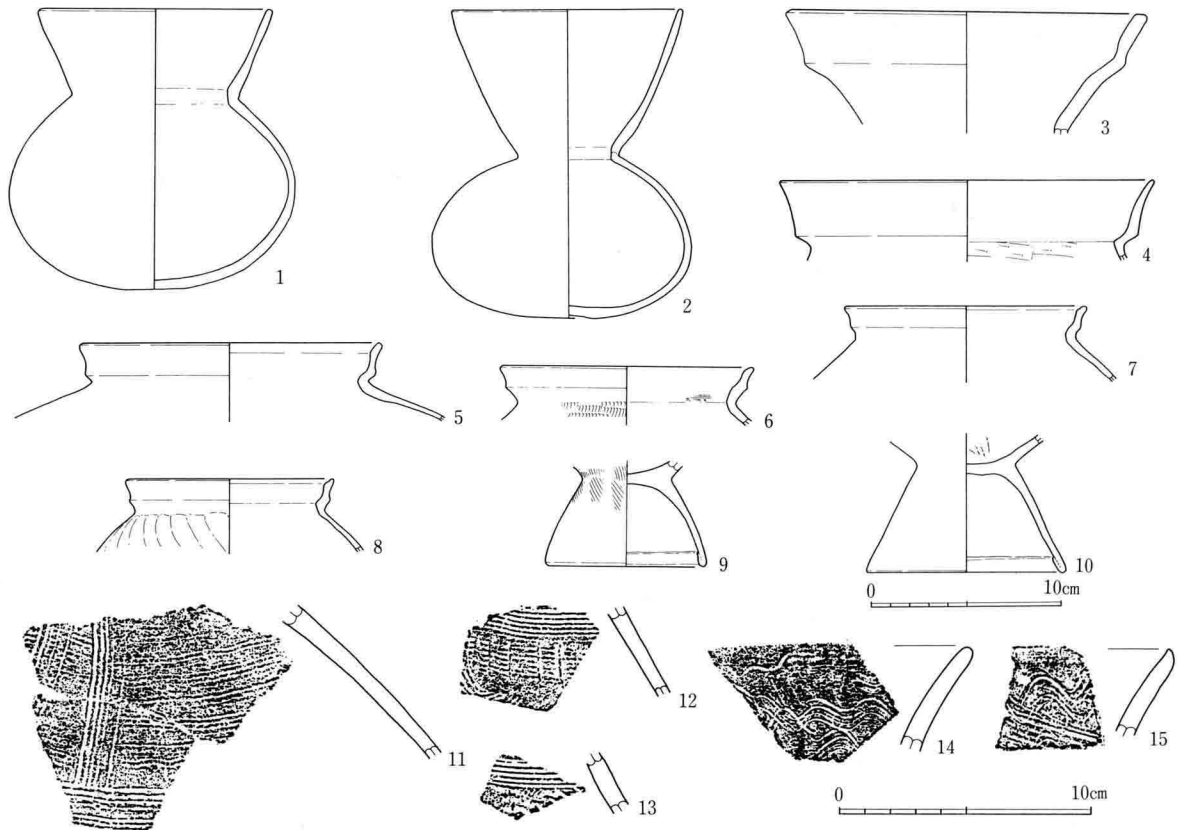


図16 第13号住居址出土土器実測図ならびに出土土器拓影

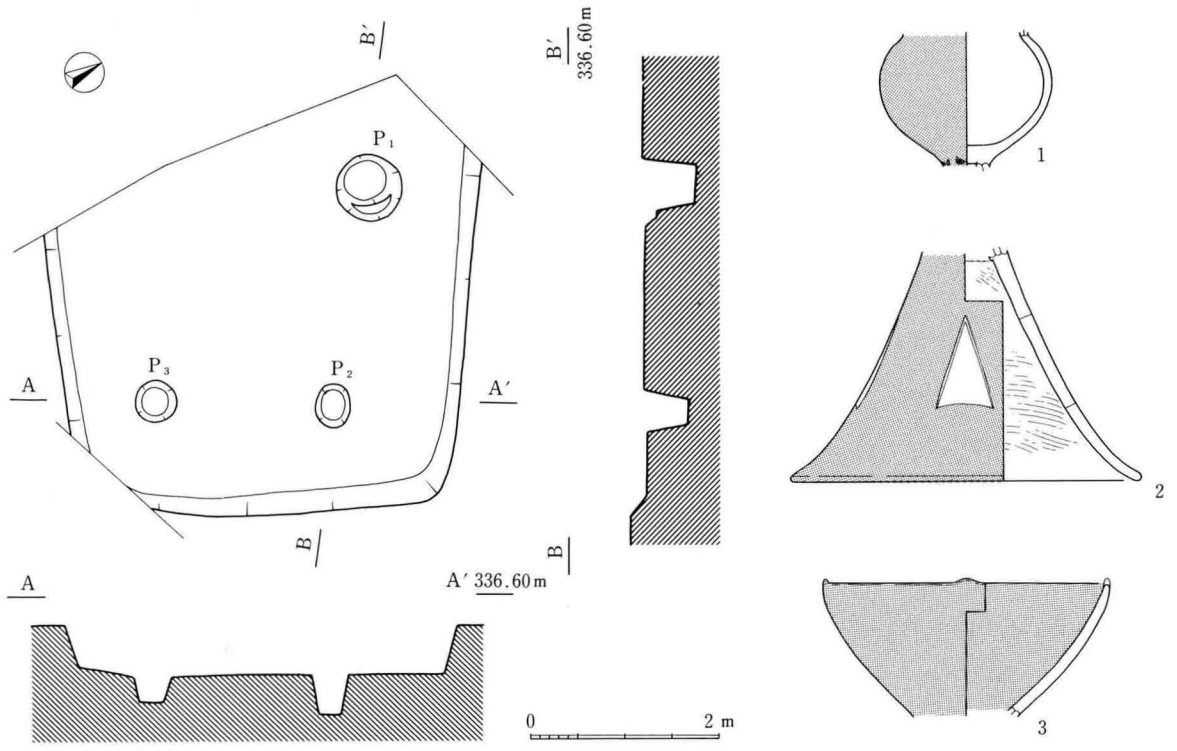


图17 第14号住居址实测图 (1 : 80)

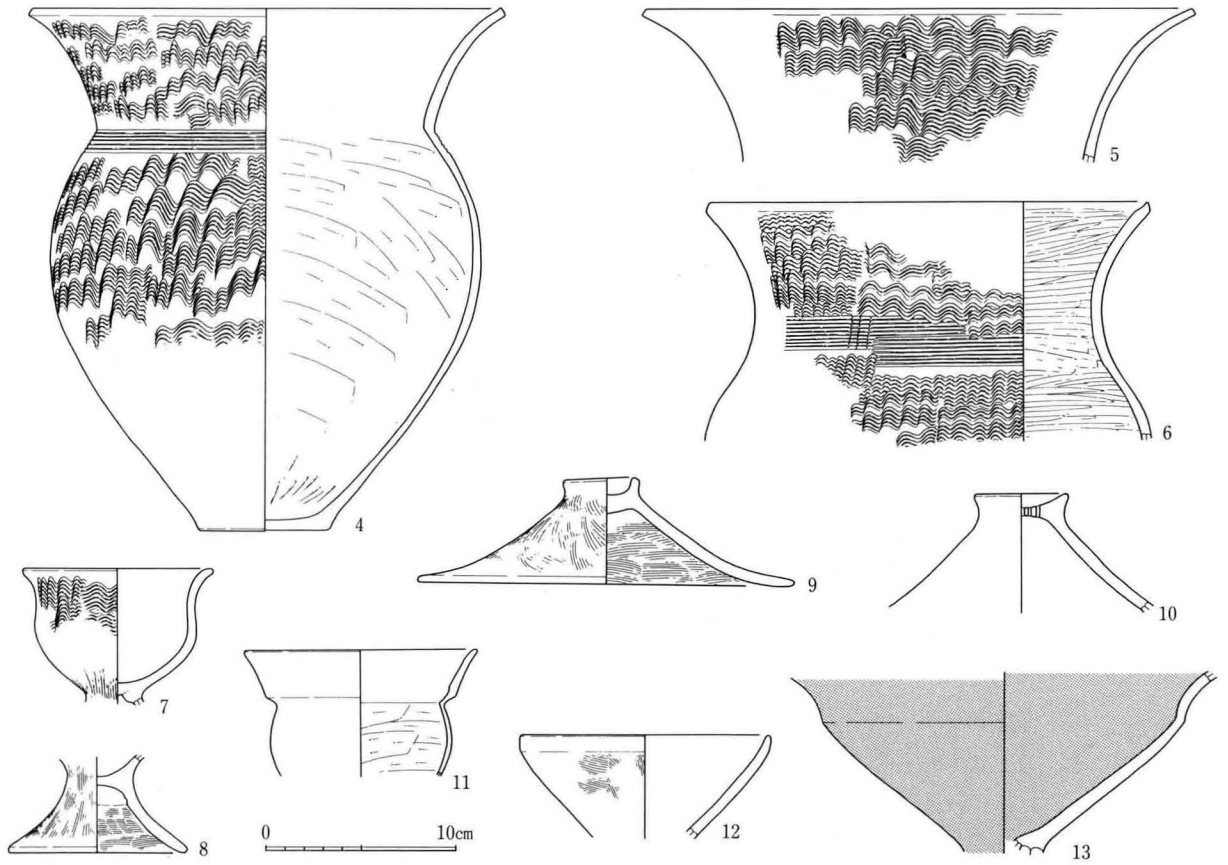


图18 第14号住居址出土土器实测图 (1 : 4)

第14号住居址 (図17・18)

調査区西端にて検出された住居址で、13号住居址に切られる。15号住居址とも切りあい関係を有するが、切りあいの先後は不明である。住居址北側は1/3程が調査区外となり、詳細は不明な部分が多いが、平面プランは短軸4.40mほどの隅丸長方形と考えられる。確認面からの掘り込みは平均40cm前後と深いが、床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。柱穴はP₁～P₃を検出しているが、いずれも支柱穴と考えられる。炉、出入口施設等その他の施設は確認していない。

出土土器はいずれも覆土内より出土したものである。(11)は有段口縁を持つ北陸系の鉢形土器で、胎土も在地のものとは異質である。甕形土器(4～6)はいずれも口唇部が面取され、波状文・簾状文の施文規範にも大きな乱れが認められる。特に(4)は内面に篋削りが認められ、北陸系土器の影響による在地形土器の変容の姿の一端を示している。出土土器の様相から弥生時代後期箱清水式期の終末期の住居址と判断される。

第15号住居址 (図3)

調査区西端にて検出されたもので、大半が13号住居址に切られ詳細は不明である。また14号住居址とも切りあうが、切りあいの先後関係は不明である。平面プランは隅丸長方形もしくは隅丸長方形と想定されるが、規模は不明である。確認面からの掘り込みは平均10cm前後と浅く、床面も軟弱で不明瞭なものである。炉・柱穴等の諸施設は確認されていない。また、明確な時期比定の根拠となる遺物も出土していない。

第17号住居址 (図19・20)

調査区中央付近にて検出した住居址で、北側1/3ほどが調査区外となる。5号住居址・3号溝址に上層を切られるが、3号住居址を切って構築される。

平面プランは長軸6.20m、短軸4.20mほどの隅丸長方形住居址と想定される。確認面からの掘り込みは平均40cm前後と深く、床面は住居址中央付近を中心に比較的固く締まった状況であった。

支柱穴はP₁～P₃を検出している。長軸3.40m、短軸1.80mほどの長方形の支柱穴配置である。南壁際に検出されたP₄・P₅は出入口施設に関連する柱穴であろう。

炉等そのほかの施設は確認されていない。

出土土器には壺(1～3)、鉢(4)、高坏(5～7)があるが、いずれも覆土内からの出土である。

出土土器の様相よりすれば、弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。

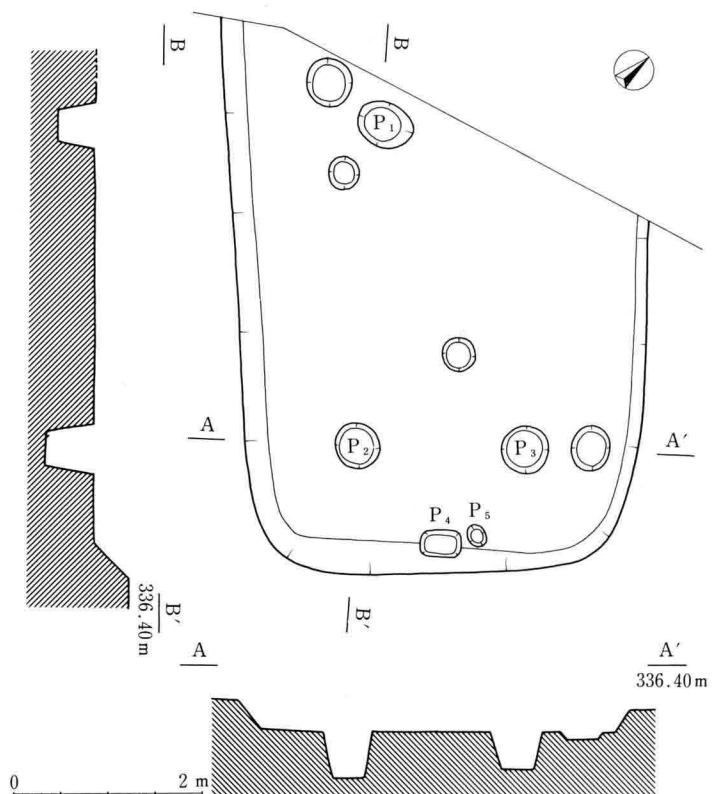


図19 第17号住居址実測図 (1:80)

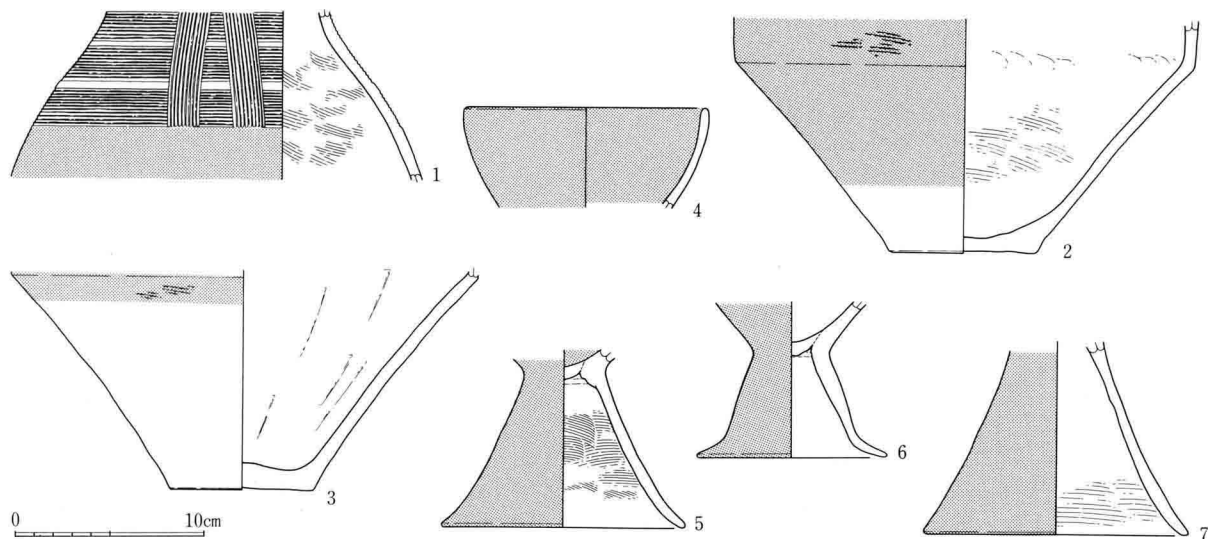


図20 第17号住居址出土土器実測図（1：4）

第5号土壌（図3・21）

調査区中央付近にて検出されたもので、上層を5号住居址に切られる。平面プランは1.20×1.00mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは平均40cm前後と深く断面逆台形状を呈する。覆土内より図21に示した甕形土器が出土している。弥生時代後期箱清水式期のものである。

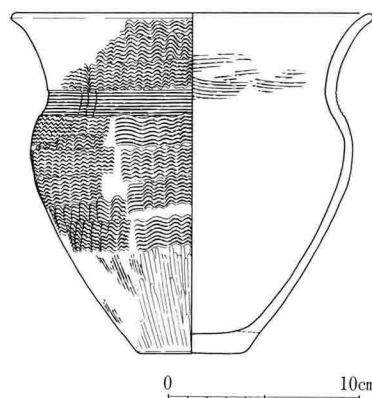


図21 第5号土壌出土土器実測図

第7号土壌（図22～24）

調査区西側にて検出されたもので、9号住居址を切って構築される。二段にわたる掘り込みを有し、上面是一片2.00mほどの不整形方形を呈し、深さ20cm程で一端平坦面をなす。その後径1.40mほどの円形の土壌となり、深さは1.40mを計る。出土土器（1～4）は、下層の円形の土壌内より出土し、（5～28）は、下層の円形土壌が埋没した後、上層の方形の掘り込み内に一括して投棄されたような状況で出土している。

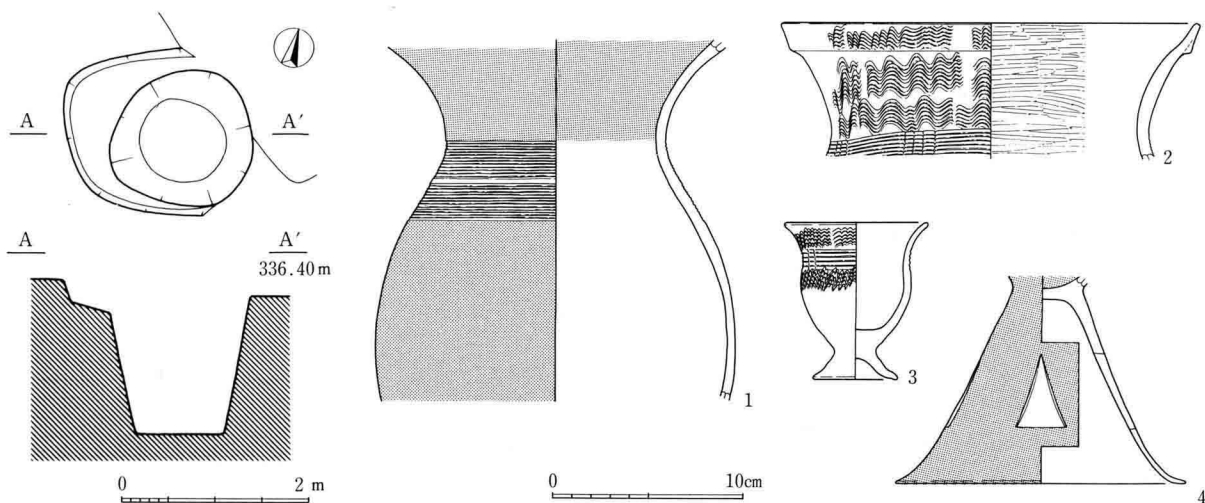


図22 第7号土壌実測図（1：80）ならびに下層出土土器実測図（1：4）

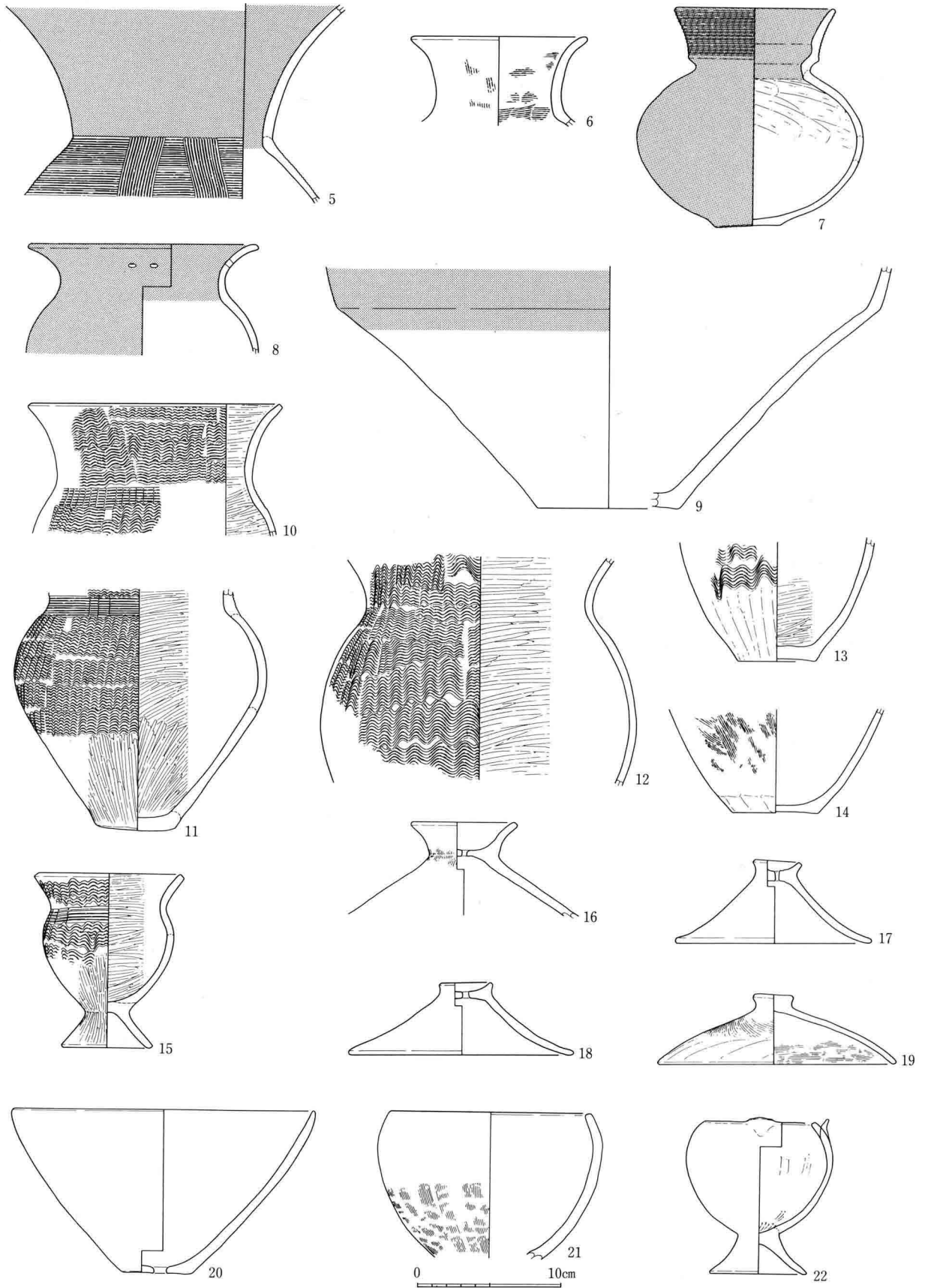


图23 第7号土壤上層出土土器実測図(1) (1 : 4)

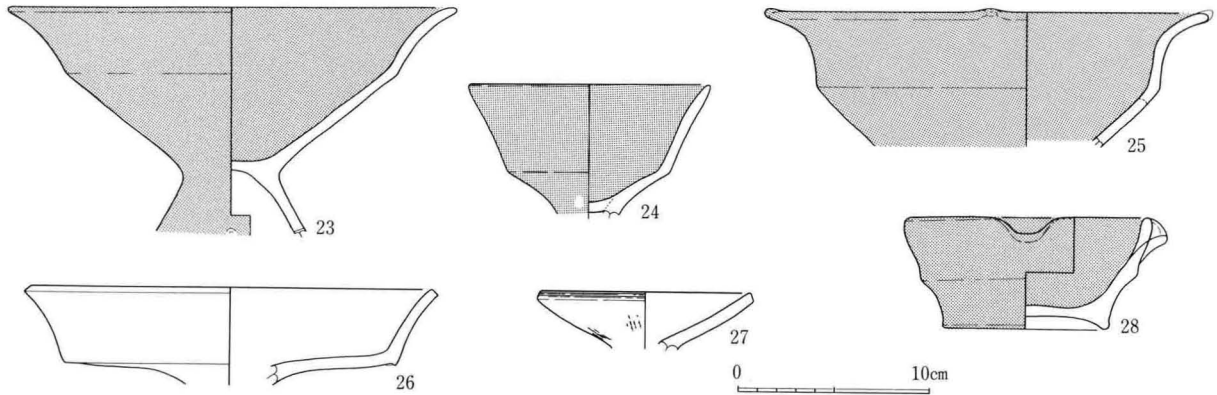


図24 第7号土壌上層出土土器実測図(2) (1:4)

壺(7)・蓋(19)・高坏(26)は北陸系の土器と考えられ、胎土も在地のものとは異質である。出土土器の様相より弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。

第8号土壌(図3・25)

調査区西側、9号住居址内部に検出されたもので、9号住居址との先後関係は不明である。平面プランは1.50×1.30mの円形を呈する。確認面からの掘り込みは平均20cm前後と浅く、断面逆台形状を呈する。出土土器には壺(1)、甕(2~4)、片口(3)、高坏(6)があるが、いずれも覆土内からの出土である。甕(2・5)はいずれも文様の施文規範に乱れがあることより、弥生時代後期箱清水式期の内でも末期に近いものであろう。

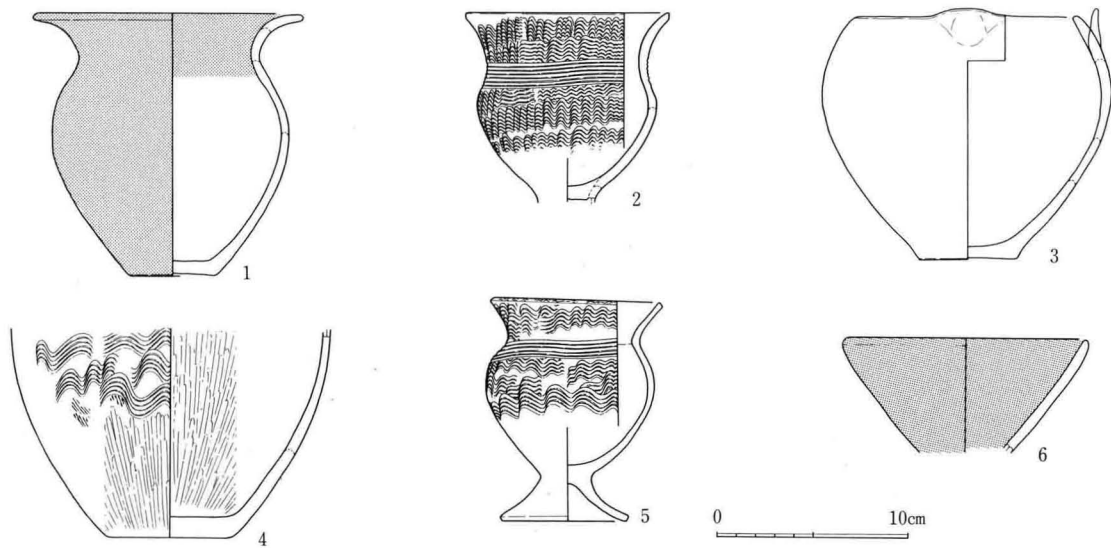


図25 第8号土壌出土土器実測図(1:4)

第10号土壌(図26)

調査区西側にて検出されたもので、9号住居址と重複するが先後関係は不明である。平面プランは径1.40mほどの円形土壌で、確認面からの掘り込みは平均20cm前後である。

出土土器には壺(1)・坏(2)があるが、ともに覆土内からの出土である。(1)は頸部4帯の直線文を2本一対の直線文で切る楯描T字文が描かれ文様以外は赤彩される。また内面頸部には篋削りの痕跡をとどめる。(2)は内外面ともに篋磨きされ赤彩される。

出土土器の様相より弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。

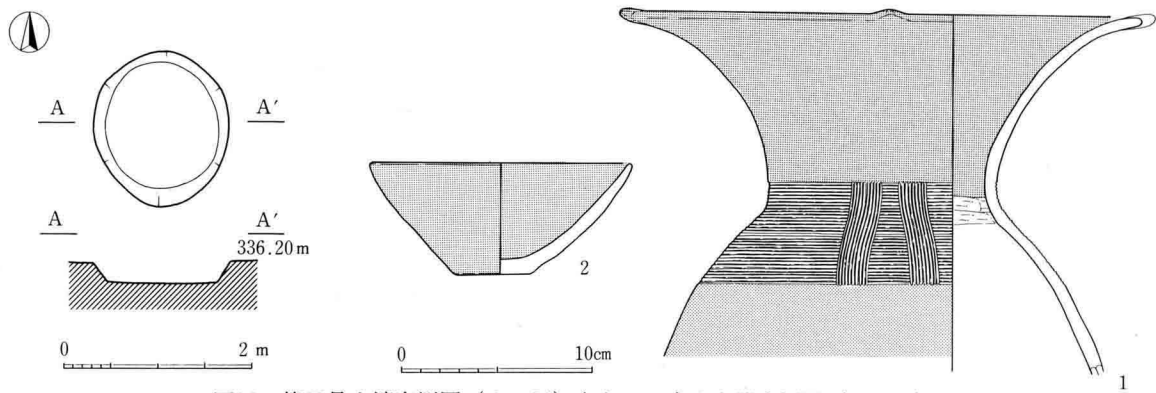


図26 第10号土壌実測図（1：80）ならびに出土土器実測図（1：4）

第11号土壌（図27）

調査区東端にて検出したもので、1号住居址を切って構築される。また、北側は一部が調査区外となる。平面プランは2.00×1.60mほどの長楕円形を呈するものと思われ、確認面からの掘り込みは平均30cm前後である。覆土内より甕（1）と片口坏（2）が出土している。甕は口縁部中位に屈曲を有する有段口縁をなし、胴部の張り出しも強い。北陸地方からの影響下に在地の土器が変容したものであろう。弥生時代後期箱清水式の終末期のものとして判断される。

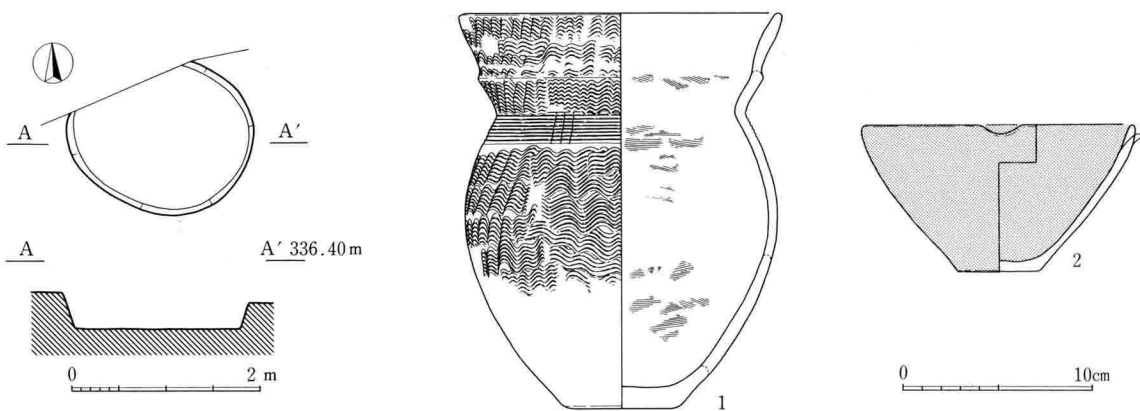


図27 第11号土壌実測図（1：80）ならびに出土土器実測図（1：4）

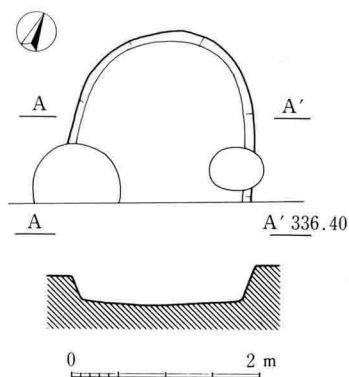


図28 第12号土壌実測図（1：80）

第12号土壌（図28・29）

調査区中央付近で検出されたもので、上層を11号住居址に切られるが、8号住居址を切って構築される。また南側1/2ほどは調査区外となる。平面プランは短軸2.00m、長軸2.50mほどの長楕円形プランを呈するものと想定され、確認面からの掘り込みは平均20cm前後である。

出土土器には壺（1）、甕（2～4）、坏（5）、高坏（6）があるが、いずれも覆土内からの出土である。甕（2～4）は文様の施文規範にかなり乱れが認められる。弥生時代後期箱清水式終末期のものであろう。

第14号土壌（図30）

調査区中央付近にて検出されたもので、上層を2号溝址に切られるが、5号住居址を切って構築される。また

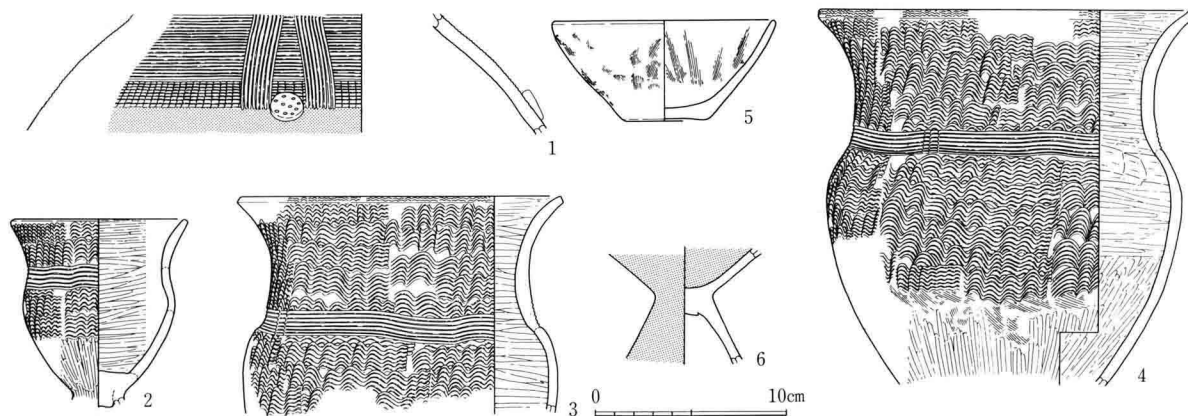


図29 第12号土壙出土土器実測図 (1 : 4)



図30 第14号土壙出土土器実測図 (1 : 4)

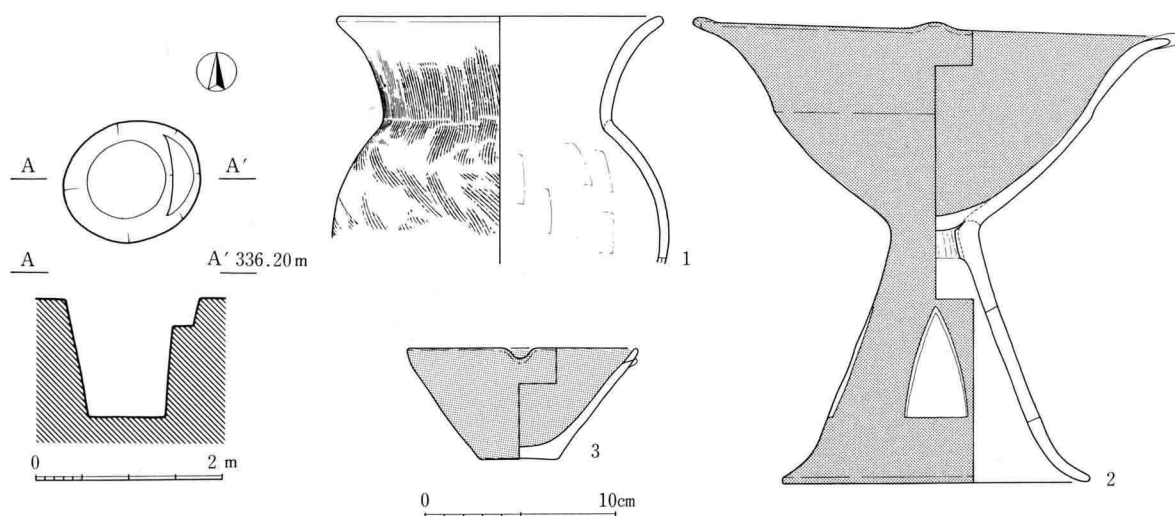


図31 第18号土壙実測図 (1 : 80) ならびに出土土器実測図 (1 : 4)

北側は1/2ほどが調査区外となる。平面プランは径1.20mほどの円形を呈すると思われるが詳細は不明である。確認面からの掘り込みは平均15cm前後と浅い。出土土器には甕（1）、壺（2）、高坏（3・4）があるがいずれも覆土内からの出土である。出土土器の様相より弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。

第18号土壙（図31）

調査区西側の第11号住居址内に検出されたもので本土壙上に11号住居址が築かれている。径1.60mほどの円形土壙である。二段にわたる掘り込みを有し、確認面からの深さは平均1.20mほどと深い。出土土器には甕（1）、高坏（2）、片口坏（3）があるがいずれも覆土内からの出土である。出土土器の様相より弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。

第1号溝址（図3）

調査区東側にて検出された、北東から南西方向へ直線的に伸びる形態の溝址である。2号・3号住居址を切る。約10mの長さにわたって検出されており、深さは平均30cmほどであるが、北東から南西に傾斜している。確認面での幅は1.20～1.60mであり、南側で幅を広げている。

出土土器には図32に示したように弥生時代終末期の遺物もあるが、これらは下層遺構からの混入と考えられるもので、時期的には古墳時代中期の溝址と想定される。

第2号溝址（図3）

調査区中央付近にて検出された溝址で、南北方向に直線的に伸びる形態を呈し、一部3号溝址と重複する。8号・11号住居址、14号・18号・19号土壙を切って構築されている。確認面での幅は平均90cm前後で、深さは20cm前後である。

時期比定の明確な根拠となる遺物は出土していないが、切りあい関係等からは1号溝址と同様、古墳時代中期のものと想定される。

第3号溝址（図3）

調査区中央付近にて検出された溝址で、1号溝址に平行するように北東から南西方向に直線的に伸びる形態を呈す溝址である。3号・5号・6号・17号住居址を切る。幅・深さともに20cmほどの小規模な溝で、南西端は2号溝に合流する。1・2号溝址同様、古墳時代中期のものと想定される。

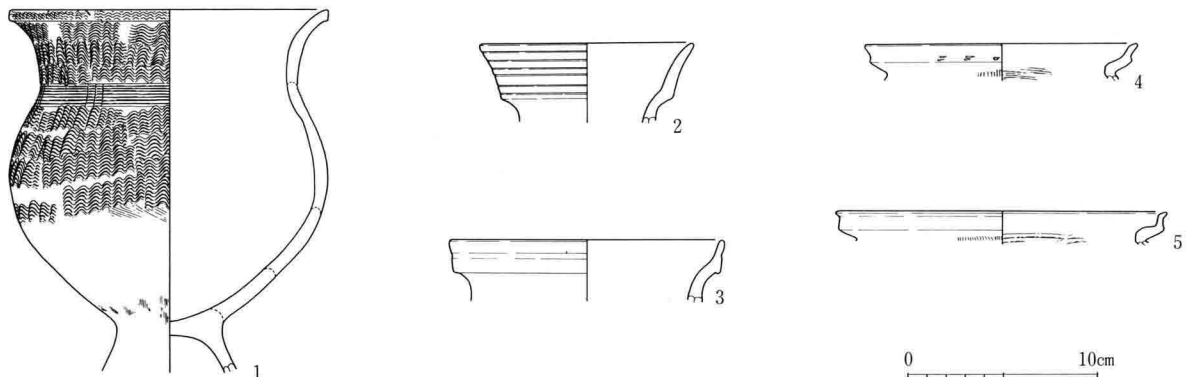


図32 第1号溝址出土土器実測図（1：4）

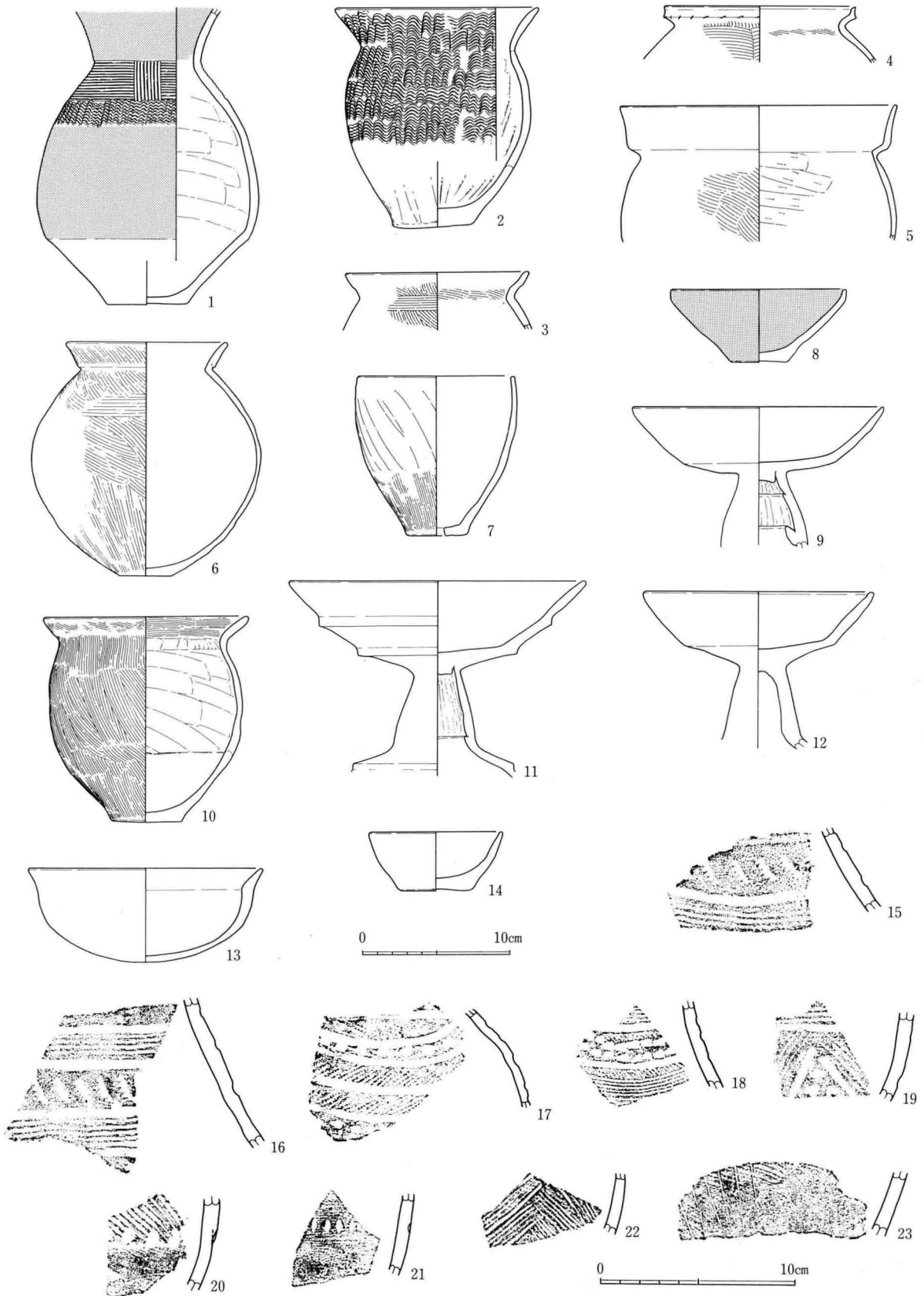


図33 遺構外出土器実測図（1：4）ならびに拓影（1：3）

表2 出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
第2号住居址									
1	壺				1/4		口縁：縦へらミガキ・赤彩 頸部：右回り等間隔止め 簾状文2帯	口縁：横へらミガキ・赤彩 頸部：ナデ	覆土
2	台甕	11.0	7.3	13.0	3/4		口縁：横ナデ 胴部上半：ハケ 胴部下半：縦へらミガキ 脚部：ハケ	口縁：横ナデ 胴部：へらミガキ？ 脚部：ハケ→ナデ	覆土
3	高坏	20.4	12.2	22.7	完形		坏部：横へらミガキ・赤彩 脚部：縦へらミガキ・赤彩 円形透孔4	坏部：横へらミガキ・赤彩 脚部：へら平滑化→ナデ	床直
4	高坏	19.5	11.7	12.2	1/3		坏部：横へらミガキ・赤彩 脚部：縦へらミガキ・赤彩 円形透孔4	口唇：面取り 坏部：へらミガキ・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	覆土
5	高坏	20.3	12.7	11.6	3/4		坏部：横へらミガキ・赤彩 脚部：縦へらミガキ・赤彩 円形透孔4	坏部：へらミガキ・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	覆土
第3号住居址									
1	壺	32.6			2/3		口唇：山形突起4 口縁：へらミガキ・赤彩 頸部：楕円T字文	口縁：横へらミガキ・赤彩 頸部：ハケ→ナデ	床直
2	台壺	15.9	11.9	23.1	完形		口縁：横へらミガキ・赤彩 頸部：3連止め簾状文 胴部：横へらミガキ・赤彩 脚部：縦へらミガキ・赤彩 三角形透孔4 円板充填	口縁：横へらミガキ・赤彩 胴部：横へらミガキ 脚部：ハケ→ナデ	床直
3	甕	27.0			1/6		口縁：楕円波状文6帯(施文順序不定) 頸部：楕円簾状文	横へらミガキ	床直
4	甕	13.3			1/4		口縁：横ナデ 頸部：楕円波状文	横へらミガキ？	床直
5	台甕	10.5			完形		頸部：3連止め簾状文→口縁：楕円波状文(上→下) 胴部下半：縦へらミガキ	ナデ	床直
6	甕		11.2		2/3		胴部上半：楕円波状文(上→下) 胴部下半：縦へらミガキ	ハケ→へらミガキ	床直
7	高坏	28.8			1/8		へらミガキ・赤彩 円板充填	へらミガキ・赤彩	覆土
8	高坏	15.6			2/3		へらミガキ・赤彩 円板充填	ハケ→横ナデ	床直
9	高坏		11.4		2/3		縦へらミガキ・赤彩 三角形透孔4	横ナデ	覆土
第5号住居址									
1	壺	32.8			1/8		縦へらミガキ・赤彩	横へらミガキ・赤彩	覆土
2	壺				1/3		頸部：楕円T字文(2本一対) 胴部：縦へらミガキ・赤彩	ナデ	床直
3	壺				1/3		口縁：縦へらミガキ・赤彩 頸部：楕円T字文(2本一対)	横へらミガキ・赤彩	覆土
4	壺				2/3		縦ハケ→軽いへらミガキ・赤彩	横ハケ→へらミガキ・赤彩	床直
5	甕	24.2	7.8	31.0	2/3		頸部：等間隔止め簾状文→口縁：楕円波状文4(下→上) 胴部上半：楕円波状文7(上→下) 胴部下半：ハケ→縦へらミガキ 底部：へらケズリ	口縁：横ハケ→横へらミガキ 胴部：ハケ→へらミガキ	覆土
6	甕	16.2			2/3	○	口唇：面取り→楕円波状文 口縁～胴部上半：楕円縦羽状文→頸部：2連止め簾状文	横へらミガキ	覆土
7	高坏	14.1	10.9	11.7	完形		口唇：山形突起4 坏部：赤彩 脚部：縦へらミガキ・赤彩 三角形透孔4 脚端部にLR縄文 円板充填	坏部：横へらミガキ・赤彩 脚部：ナデ	覆土
8	高坏	22.8	14.9	18.5	3/4		口唇：山形突起4 坏部：横へらミガキ・赤彩 脚部：縦へらミガキ・赤彩 三角形透孔4 円板充填	坏部：横へらミガキ・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	覆土
9	高坏	15.5	13.3	13.3	3/4		坏部：へらミガキ・赤彩 脚部：へらミガキ・赤彩 三角形透孔4 円板充填	坏部：へらミガキ・赤彩 脚部：ナデ	覆土
10	蓋	6.6		2.0	完形		へらミガキ・赤彩 2個一対の穿孔2か所	へらミガキ・赤彩	床直
11	片口鉢	8.3	4.8	2.6	完形		片口1 ハケ→横ナデ→軽いへらミガキ・赤彩 底部：へらミガキ・赤彩	へらミガキ・赤彩	床直
第8号住居址									
1	壺				1/6		頸部：楕円T字文+円形浮文 胴部：横へらミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	覆土

表3 出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
第9号住居址									
1	壺				1/3	○	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	ユビナデ	覆土
2	壺		12.6		4/5		胴部上半：ヘラミガキ・赤彩 胴部下半：縦ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ハケ・ヘラナデ	床直
3	甗	23.8			4/5		頸部：3連止め簾状文→口縁：櫛描波状文5(下→上) 胴部：櫛描波状文(上→下)	横ヘラミガキ	床直
第11号住居址									
1	甗	17.0			1/3	○	口縁：縦ハケ 胴部：ハケ	口縁：横ハケ 胴部：ヘラナデ→ナデ	覆土
第13号住居址									
1	壺	12.4		14.8	完形		口縁：横ナデ 胴部：横ヘラケズリ→ナデ	口縁：横ナデ 頸部：ヘラケズリ→ナデ 胴部：ナデ	覆土
2	壺	12.2	3.1	16.3	完形		口縁：縦ヘラミガキ 胴部：横ヘラケズリ→ナデ	口縁：縦ヘラミガキ 胴部：ナデ	覆土
3	壺	19.2			完形		横ナデ→横ヘラミガキ	横ヘラミガキ	床直
4	甗	20.0			1/10	○	横ナデ	口縁：横ナデ 頸部：ヘラケズリ	覆土
5	甗	16.0			1/8	○	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ→ナデ	横ナデ	覆土
6	甗	13.4			1/8		口縁：横ナデ 胴部：ハケ	口縁：ハケ→横ナデ 胴部：ナデ	覆土
7	甗	12.9			1/10		口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ	ナデ	覆土
8	甗	11.0			1/3		口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ→ナデ	横ナデ	覆土
9	台甗		8.5		完形	○	脚部：ハケ→ナデ	ナデ 脚端部：折り返し	覆土
10	台甗		10.6		2/3		脚部：ヘラケズリ 胴部：ナデ	胴部：ヘラ平滑化→ナデ 脚部：ナデ 脚端部：折り返し	床直
第14号住居址									
1	台壺				1/3		横ヘラミガキ・赤彩	軽いヘラミガキ	覆土
2	高坏		18.5		2/3		ヘラミガキ・赤彩 三角形透孔4	ハケ→ナデ	覆土
3	高坏	15.1			2/3		口縁：山形突起4 坏部：横ヘラミガキ・赤彩	横ヘラミガキ・赤彩	覆土
4	甗	25.4	7.2	27.6	2/3		口唇：面取り 口縁～胴部上半：櫛描波状文(施文に規則性なし)→頸部：櫛描直線文 胴部下半：縦ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	口縁：軽いヘラミガキ 胴部：ヘラケズリ→軽いヘラミガキ	覆土
5	甗	29.2			1/10		口縁：櫛描波状文(施文に規則性なし) 口唇：面取り	横ヘラミガキ	覆土
6	甗	23.1			1/5		口唇：面取り 口縁～胴部上半：櫛描波状文(上→下)→頸部：3連止め簾状文	ヘラケズリ→ヘラミガキ	覆土
7	台甗	10.2			完形		口縁：櫛描波状文2 胴部下半：ヘラミガキ 脚部：ハケ→ナデ	横ヘラミガキ	覆土
8	台甗		9.6		完形		縦ハケ→ナデ	胴部：ナデ 脚部：ハケ→ナデ	覆土
9	蓋	20.0		5.6	完形		つまみ部：ナデ 体部：ハケ→ナデ	ハケ	覆土
10	蓋				完形		つまみ部：焼成前穿孔1 ナデ 体部：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	覆土
11	鉢	12.4			1/4	○	口縁：横ナデ 体部：ナデ	口縁：横ナデ 体部：ヘラケズリ	覆土
12	鉢	13.2			1/3		口縁：横ナデ 坏部：ハケ→縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	覆土
13	高坏				3/4		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土

表4 出土土器観察表(3)

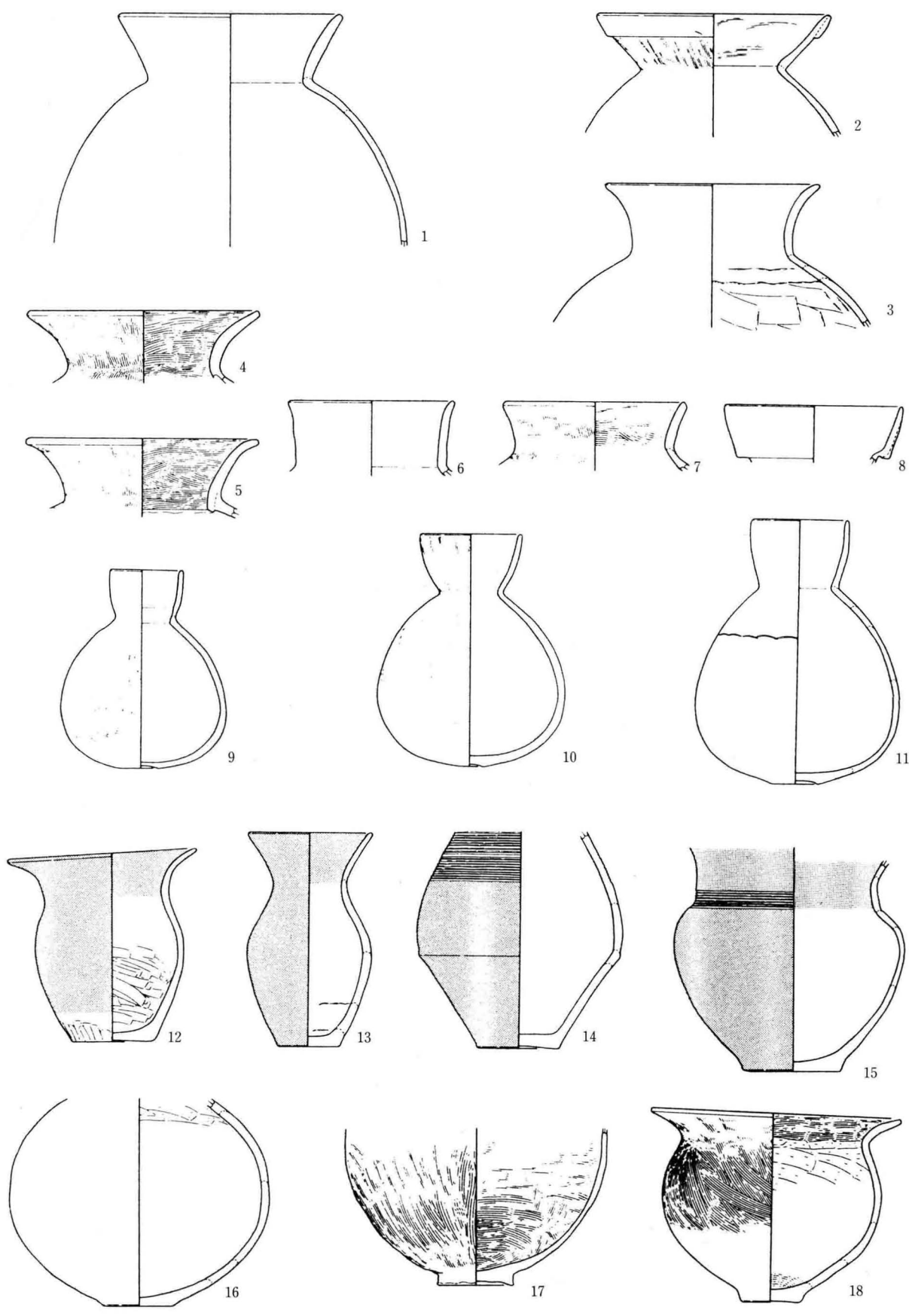
番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
第17号住居址									
1	壺				1/4		頸部：櫛描T字文（2本一対） 胴部：へらミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	覆土
2	壺		7.8		3/4		胴部上半：ハケ→横へらミガキ・赤彩 胴部上半：へらケズリ→縦へらミガキ・赤彩 底部：へらケズリ	ハケ→ナデ	覆土
3	壺		7.6		完形		胴部上半：へらミガキ・赤彩 胴部下半：ハケ→縦へらミガキ 底部：へらケズリ	へらナデ→ナデ	覆土
4	鉢	12.9			1/2		へらミガキ・赤彩	横へらミガキ・赤彩	覆土
5	高坏	12.9			完形		縦へらミガキ・赤彩 円板充填	坏部：へらミガキ・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	覆土
6	高坏	10.0			2/3		縦へらミガキ・赤彩 円板充填	坏部：へらミガキ・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	覆土
7	高坏	14.0			完形		へらミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	覆土
第5号土壙									
1	甕	19.2	5.8	18.0	2/5		頸部：3連止め簾状文→口縁～胴部上半：櫛描波状文（上→下） 胴部下半：斜めハケ→縦へらミガキ 底部：へらケズリ→へらミガキ	ハケ→横へらミガキ	覆土
第7号土壙									
1	壺				3/5		口縁：縦へらミガキ・赤彩 頸部：櫛描直線文2 胴部：横へらミガキ・赤彩	口縁：横へらミガキ・赤彩 胴部：横ナデ	下層
2	甕	22.1			1/8		折り返し口縁 口縁：櫛描波状文→頸部：4連止め簾状文	横へらミガキ	下層
3	台甕	7.6	4.5	8.3	2/3		頸部：左回り2連止め簾状文→口縁・胴部上半：簾状波状文 胴部下半～脚部：ナデ	胴部：ナデ 脚部点ナデ	下層
4	高坏		15.4		完形		脚部：へらミガキ・赤彩 三角形透孔4	坏部：へらミガキ・赤彩 脚部：へら平滑化→ナデ	下層
5	壺				2/3		口縁：縦へらミガキ・赤彩 頸部：櫛描T字文（2本一対）	口縁：横へらミガキ・赤彩 胴部：ハケ→ナデ	上層
6	壺	12.5			1/3		口縁：縦ハケ→縦へらミガキ	横ハケ→横へらミガキ	上層
7	壺	11.4	5.0	15.3	完形	○	口縁：櫛状工具による擬凹線文・赤彩 胴部：へらミガキ・赤彩 底部：へらケズリ→へらミガキ・赤彩	口縁：へらミガキ・赤彩 胴部上半：へらケズリ 胴部下半：ナデ	上層
8	壺	16.3			1/3		口縁：2個一対の穿孔2か所 横へらミガキ・赤彩	口縁：横へらミガキ・赤彩 胴部：へらミガキ：折り	上層
9	壺		10.1		1/3		へらミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	上層
10	甕	17.9			1/2		口唇：面取り 頸部：等間隔止め簾状文→口縁：櫛描波状文4（区画施文） 胴部：櫛描波状文	横へらミガキ	
11	甕		5.6		2/3		頸部：3連止め簾状文→口縁・胴部上半：櫛描波状文5（上→下） 胴部下半：縦へらミガキ	へらミガキ	上層
12	甕				1/4		口縁～胴部：櫛描波状文（下→上）	横へらミガキ	上層
13	甕		5.6		3/4		胴部上半：櫛描波状文（上→下） 胴部下半：縦へらケズリ→へらミガキ 底部：へらケズリ	へらミガキ	上層
14	甕		6.0		1/3		斜めハケ→縦へらミガキ 底部周辺のみ横へらケズリ 底部：へらケズリ	斜めへらミガキ	上層
15	台甕	10.6	6.4	12.3	1/3		頸部：3連止め簾状文→口縁：櫛描波状文2（下→上） 胴部上半：櫛描波状文3（上→下） 胴部下半～脚部：縦へらミガキ	口縁～胴部：へらミガキ 脚部：ナデ	上層
16	蓋	23.1			2/3		つまみ部：ハケ→横ナデ 体部：縦へらミガキ 焼成前穿孔1	つまみ部：横ナデ 体部：横へらミガキ	上層
17	蓋	13.9		5.8	2/3		つまみ部：ナデ 焼成前穿孔1 底部：縦へらミガキ	つまみ部：ナデ 体部：へらミガキ	上層
18	蓋	15.8		5.1	完形		つまみ部：ナデ 焼成前穿孔1 体部→へらミガキ	つまみ部：ナデ 体部：横へらミガキ	上層

表5 出土土器観察表(4)

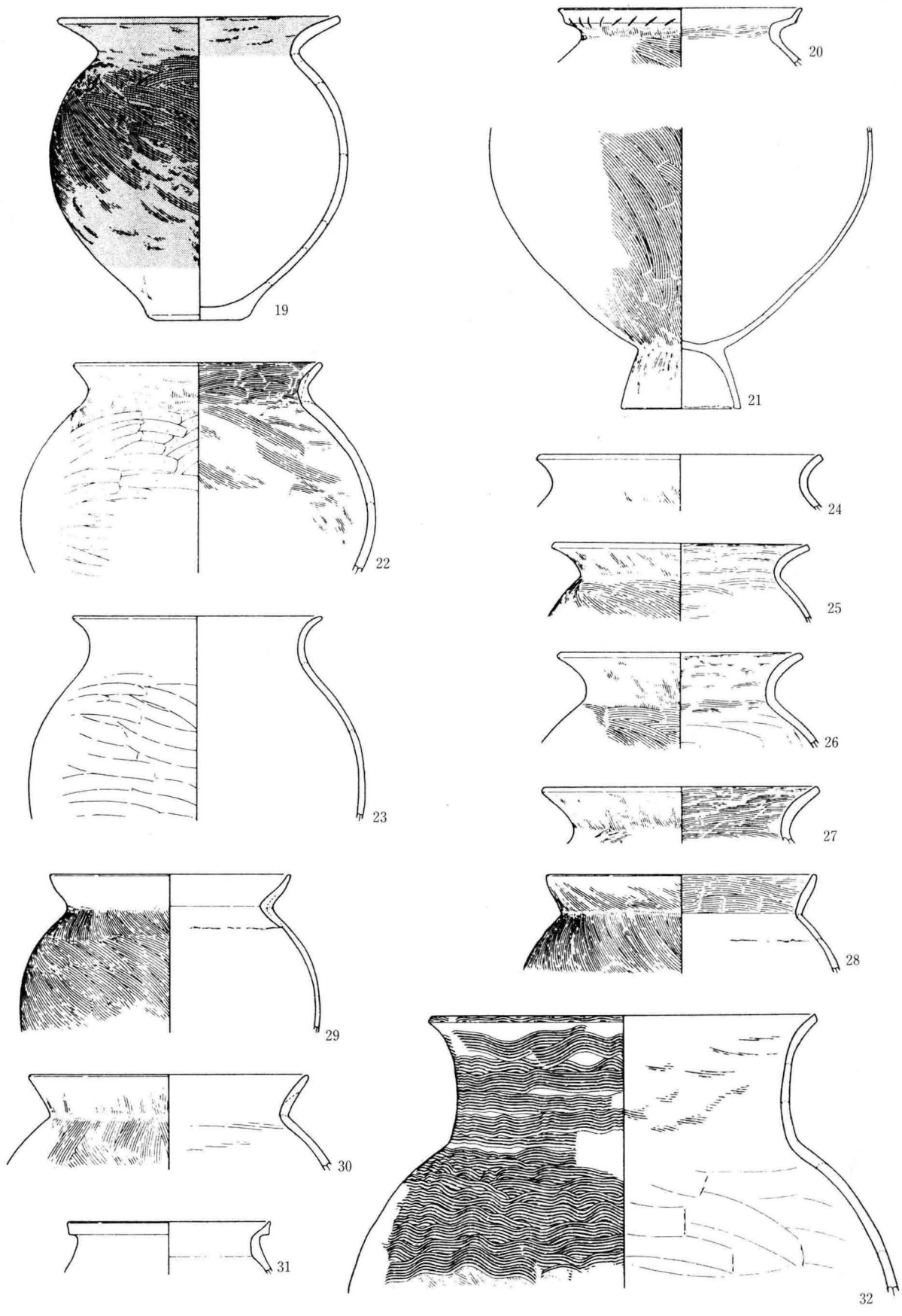
番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
第7号土壙									
19	蓋	17.0		5.0	4/5		つまみ部：ナデ 体部：ハケ→ヘラミガキ	横ハケ→軽いヘラミガキ	上層
20	甌	21.3	4.8	11.5	完形		体部：縦ヘラミガキ 底部：焼成前穿孔1	ヘラナデ→ヘラミガキ	上層
21	鉢	14.0			1/4		口縁：横ナデ→横ヘラミガキ 体部：縦ハケ→横ヘラミガキ	横ヘラミガキ	上層
22	台鉢	7.8	6.9	10.7	1/2		口縁：片口1 胴部：ヘラミガキ 脚部：ヘラミガキ	横ヘラミガキ・赤彩	上層
23	高坏	23.9			2/3		坏部：横ヘラミガキ・赤彩 脚部：縦ヘラミガキ・赤彩 円形透孔	坏部：横ヘラミガキ・赤彩 脚部：ナデ	上層
24	高坏	12.7			2/3		横ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	上層
25	高坏	23.2			1/4		口唇：山形突起4 坏部：横ヘラミガキ・赤彩	横ヘラミガキ・赤彩	上層
26	高坏	22.0			3/5		強い横ナデ 口唇：面取り	磨耗詳細不明	上層
27	器台	11.4			1/4		口唇：擬凹線 坏部：→縦ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	上層
28	片口鉢	13.0	8.8	5.9	完形		口唇：片口1 体部：横ヘラミガキ		
第8号土壙									
1	壺	14.7	4.6	13.8	完形		口縁：横ヘラミガキ・赤彩 胴部：縦ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ	口縁：横ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキorナデ	覆土
2	甕		6.8		3/4		楕描波状文(上→下) ハケ→縦ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ	縦ヘラミガキ	覆土
3	台甕	10.8	4.5	8.3	3/4		口縁～胴部上半：楕描波状文→頸部：楕描直線文 胴部下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	覆土
4	台甕	9.1	6.8	10.7	3/4		口唇：面取り→楕描波状文 口縁～胴部上半：楕描波状文→頸部：楕描直線文 胴部下半～脚部：ヘラミガキ	胴部：ヘラミガキ 脚部：ナデ	覆土
5	片口鉢	11.6	5.0	12.9	2/3		口唇：片口1 口縁：横ヘラミガキ 体部：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	覆土
6	高坏	13.0			1/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	覆土
第10号土壙									
1	壺	27.2			4/5		口唇：山形突起4 口縁：縦ヘラミガキ・赤彩 頸部：楕描T字文(2本一対) 胴部：横ヘラミガキ・赤彩	口縁：横ヘラミガキ・赤彩 頸部：ヘラケズリ 胴部：ナデ	覆土
2	坏	13.9	3.9	6.0	完形		体部：横ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ	横ヘラミガキ・赤彩	覆土
第11号土壙									
1	甕	17.1	6.2	20.8	2/3		頸部：3連止め簾状文 口縁：楕描波状文(上→下) 胴部：楕描波状文(下→上) 胴部下半：縦ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ハケ→横ヘラミガキ	覆土
2	片口坏	14.6	4.4	7.8	3/4		口唇：片口1 坏部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	覆土
第12号土壙									
1	壺				1/6		楕描T字文+円形浮文	ナデ	覆土
2	台甕	9.4			2/3		口縁～胴部上半：楕描波状文(上～下)→頸部：楕描直線文 胴部下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	覆土
3	甕	17.3			完形		口唇：面取り→楕描波状文 口縁～胴部上半：楕描波状文(上→下)→頸部：楕描直線文	横ヘラミガキorナデ 体部：横ヘラミガキ	覆土
4	甕	19.8			2/3		口唇：面取り→楕描波状文 口縁～胴部上半：楕描波状文(上→下)→頸部：3連止め簾状文 胴部下半：ハケ→縦ヘラミガキ	口縁：ハケ→横ヘラミガキ 胴部：ヘラケズリ→横ヘラミガキ	覆土
5	坏	11.9	4.3	5.3	完形		体部：ハケ→ナデ 底部：ナデ	ハケ→ナデ	覆土

表6 出土土器観察表(5)

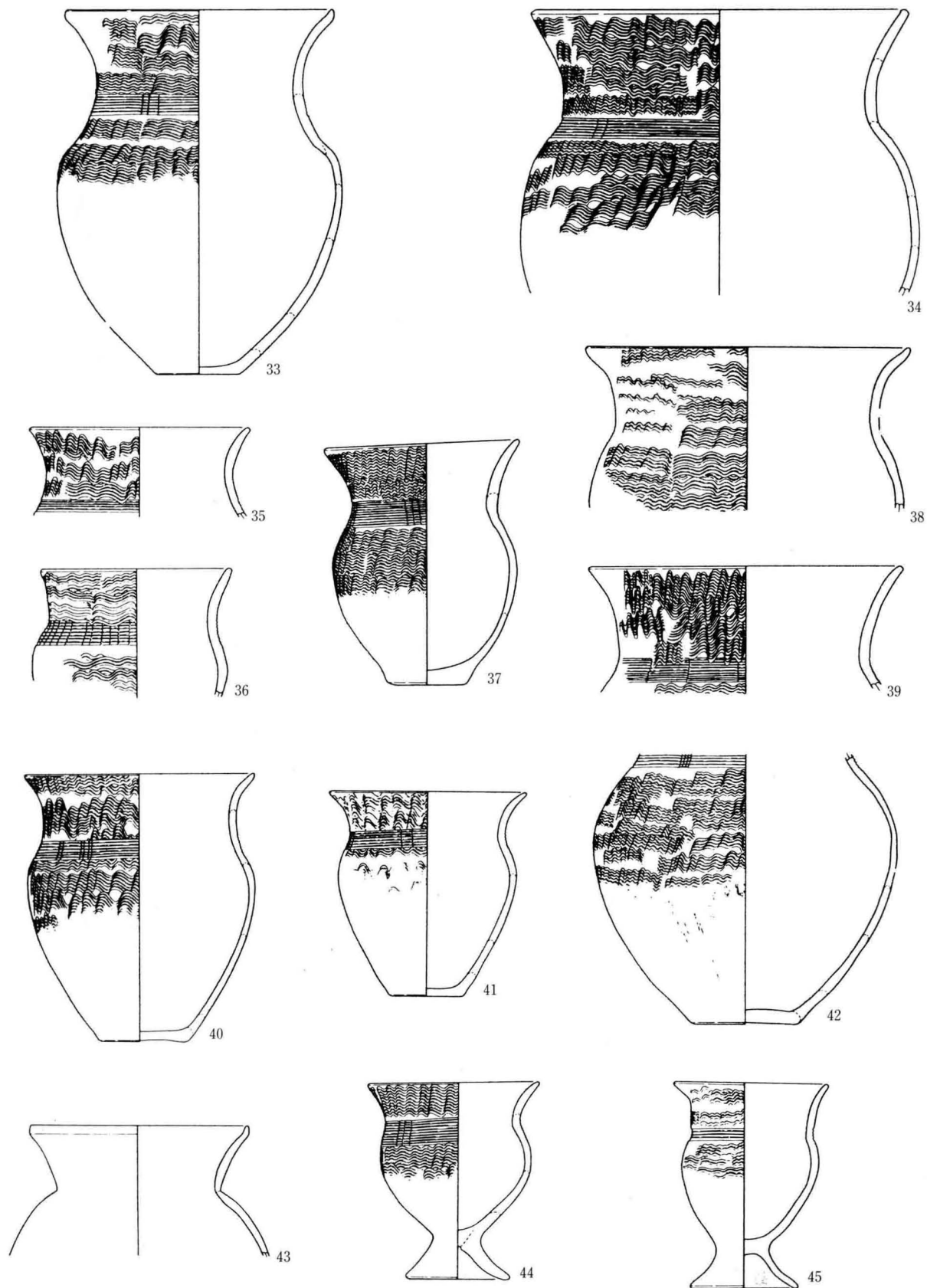
番号	器種	法量 (cm)			遺存度	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高			外面	内面	
第12号土壙									
6	高坏				2/3		ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩 脚部：ナデ	覆土
第14号土壙									
1	甕	24.3			3/4		口唇：面取り 口縁～胴部上半：櫛描波状文→頸部：4連止め簾状文 胴部下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	覆土
2	壺	14.6			3/4		口唇：面取り、横ナデ 口縁：ヘラミガキ	横ヘラミガキ	覆土
3	高坏				3/4		縦ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	覆土
4	高坏		10.4		完形		ヘラミガキ・赤彩 三角形透孔4	横ナデ	覆土
第18号土壙									
1	甕	17.2			3/4		口唇：強横ナデ 口唇：縦ハケ→縦ヘラミガキ 胴部：斜めハケ→ヘラミガキ	口縁：強横ナデ 胴部：ヘラナデ→ナデ	覆土
2	高坏	24.7	16.2	23.9	4/5		口唇：山形突起4 坏部：横ヘラミガキ・赤彩 脚部：縦ヘラミガキ・赤彩 三角形透孔4 円板充填	坏部：横ヘラミガキ・赤彩 脚部：ハケ→ナデ	覆土
3	片口坏	12.1	2.1	9.9	完形		口唇：片口1 体部：横ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ・赤彩	横ヘラミガキ・赤彩	覆土
第1号溝址									
1	台甕	16.9			完形		口唇：面取り→櫛描波状文 頸部：3連止め簾状文→口縁：櫛描波状文(下→上) 胴部上半：櫛描波状文(上→下) 胴部下半：ハケ→ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ	覆土
2	壺	11.3			1/10		口縁：篋描沈線による擬凹線文 頸部：横ナデ	ナデ	覆土
3	甕	14.5			1/10		口縁：横ナデ 頸部：横ナデ	横ナデ	覆土
4	甕	14.6			1/10	○	口縁：横ナデ 篋状工具による連続刺突 胴部：ハケ	横ハケ→横ナデ	覆土
5	甕	17.6			1/10	○	口縁：横ナデ 脚部：ハケ	横ハケ→横ナデ	覆土
遺構外出土土器									
1	壺		5.4		2/3		口縁：縦ヘラミガキ・赤彩 頸部：櫛描T字文+櫛描波状文 胴部上半：横ヘラミガキ・赤彩 胴部下半：縦ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ	口縁：横ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラナデ→ナデ	
2	甕	14.0	5.5	15.0	3/4		口縁～胴部上半：櫛描波状文(上→下) 胴部下半：縦ヘラケズリ→縦ヘラミガキ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラナデ→ナデ	
3	甕	12.6			1/3		口縁：横ナデ 頸部～胴部：ハケ	口縁：横ナデ 頸部：ハケ 胴部：ナデ	
4	甕	13.0			1/10	○	口縁：横ナデ→篋連続刺突 胴部：ナデ	口縁：横ナデ 頸部：ハケ 胴部：ナデ	
5	甕	19.0			1/6	○	口縁：横ナデ 胴部：ハケ→ヘラナデ	口縁：横ナデ 胴部：ヘラケズリ	
6	甕	11.2	3.6	16.0	1/4		口縁：ハケ→ナデ 胴部：ハケ	口縁：横ナデ 胴部：ナデ	
7	甗	10.9	4.3	10.9	1/3		口唇：面取り 体部上半：斜めヘラケズリ 体部下半：斜めハケ 底部：焼成前穿孔1	ナデ	
8	坏	12.1	3.8	5.0	2/3		体部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ・赤彩	
9	高坏	17.2			4/5		坏部：縦ヘラミガキ 脚部：縦ヘラミガキ	坏部：縦ヘラミガキ 脚部：シホリ→ナデ	
10	甕	14.1	4.9	14.0	完形		口縁：斜めハケ→ナデ 脚部：斜めハケ 底部：ヘラケズリ	口縁：横ハケ 胴部上半：ヘラケズリ→ナデ 胴部下半：ナデ	
11	高坏	20.4			2/3		ヘラミガキ? (磨耗不明)	坏部：横ヘラミガキ 脚部：シホリ→ナデ	



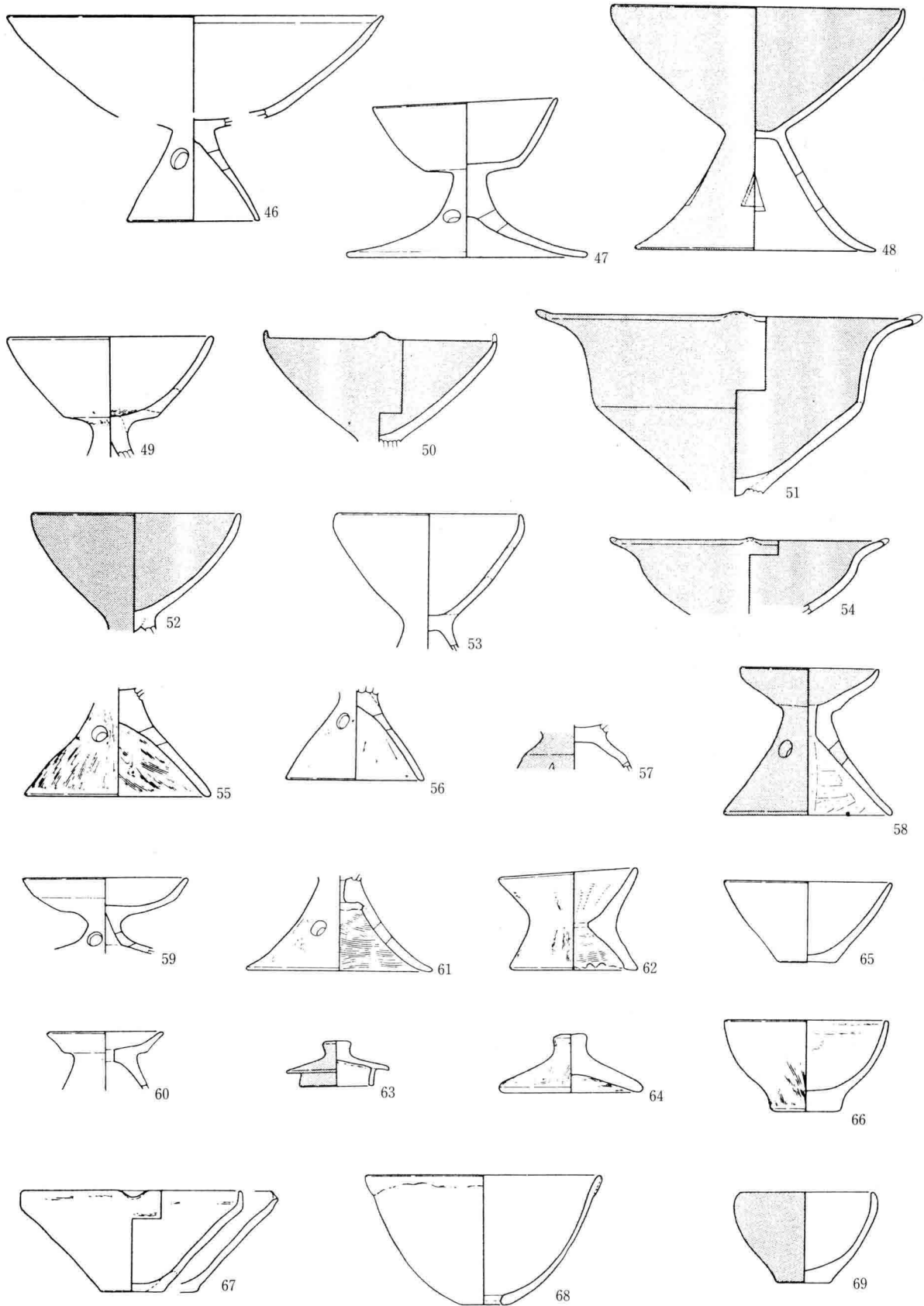
参考資料1 中俣遺跡第一次調査13号溝址出土資料(1:4)



参考資料2 中俣遺跡第一次調査13号溝址出土資料 (1 : 4)



参考資料 3 中俣遺跡第一次調査13号溝址出土資料 (1 : 4)



参考資料 4 中俣遺跡第一次調査13号溝址出土資料 (1 : 4)



調査地周辺の地形



第3号住居址土器出土状况



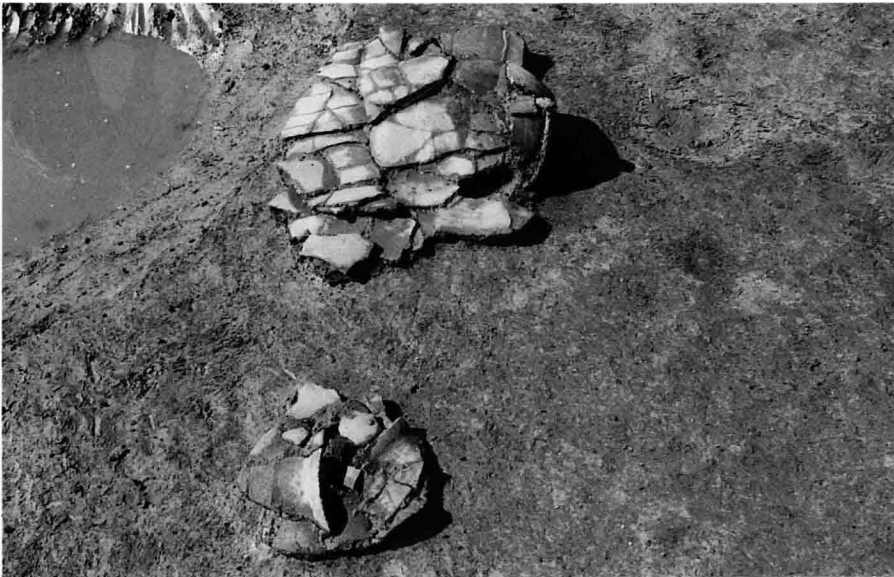
第3号住居址



第5号住居址



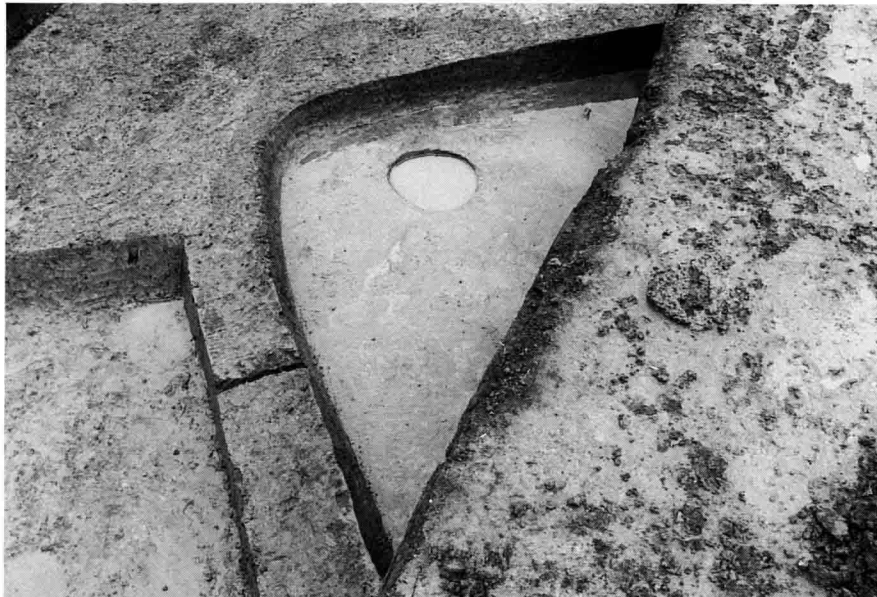
第9号住居址



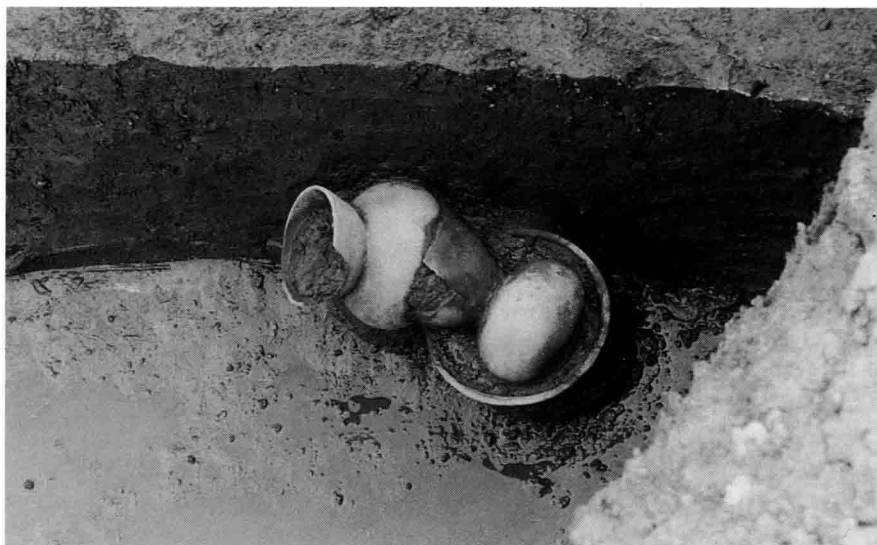
第9号住居址土器出土状况



第10号住居址



第13号住居址



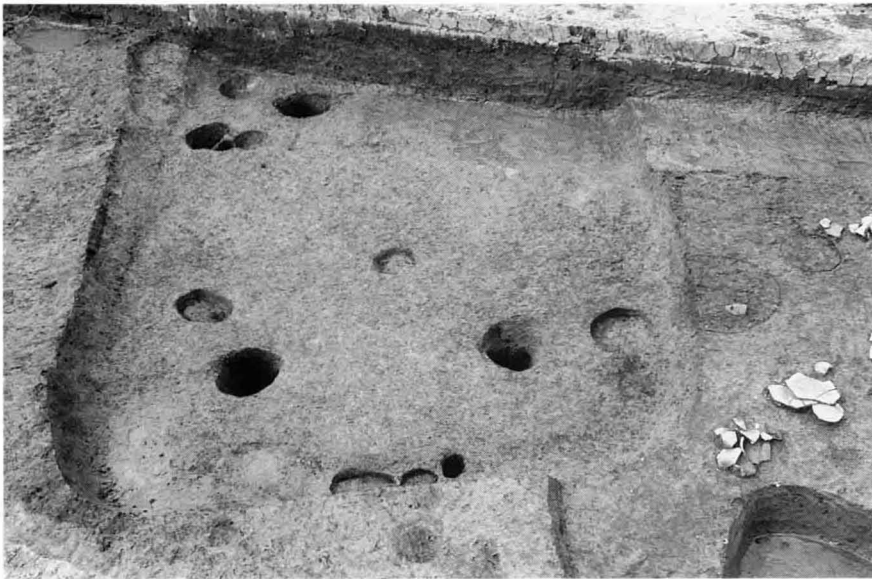
第13号住居址土器出土状况



第14号住居址



第13号・14号住居址



第17号住居址



第7号土壙



第7号土壙土器出土状況



調査区全景



重機表土剥ぎ



調査風景



2号住(2)



2号住(3)



2号住(4)



2号住(5)



3号住(1)



3号住(6)



3号住(2)



3号住(5)



5号住(5)



5号住(8)



5号住(7)



5号住(9)



5号住(11)



13号住(1)



13号住(2)



11号住(1)



14号住(4)



5号土壙(1)



7号土壙(1)



7号土壙(3)



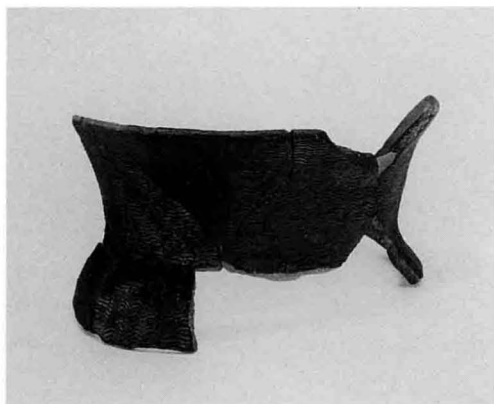
7号土壙(5)



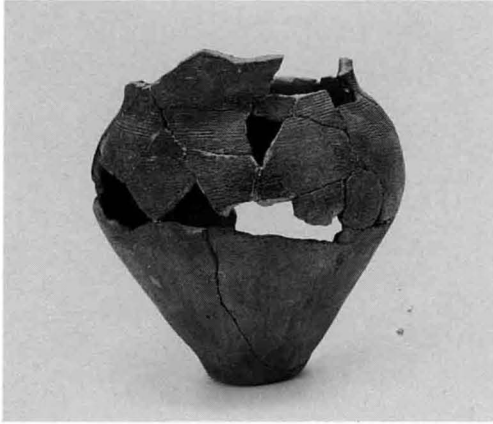
7号土壙(4)



7号土壙(7)



7号土壙(10)



7号土壙(11)



7号土壙(15)



7号土壙(18)



7号土壙(19)



7号土壙(22)



7号土壙(20)



7号土壙(23)



7号土壙(28)



8号土壙(1)



8号土壙(3)



8号土壙(4)



8号土壙(5)



10号土壙(1)



11号土壙(1)



10号土壙(2)



12号土壙(3)



12号土壙(4)



12号土壙(2)



14号土壙(1)



18号土壙(1)



18号土壙(2)



1号溝址(1)



遺構外(1)



遺構外(2)

報告書抄録

ふりがな	こじま・やなぎはらいせきぐん みのちましますいちげんじんじゃいせき							
書名	小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡II							
副書名	(株)山二 小島宅地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第80集							
編著者名	千野 浩							
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-22 長野県長野市小島田町1414番地 長野市立博物館内 ☎(026)284-0004							
発行年月日	平成9年3月25日							
印刷製本	鬼灯書籍株式会社 長野市柳原2133-5 ☎(026)244-0235							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みのちましますいち 水内坐一元神社遺跡	ながのけんながのし 長野県長野市 こじまおか 大字小島字岡 だせぎみなみ 田堰南 484-1他	20201	8398	36° 39' 49"	138° 15' 29"	1996年 8月19日) 9月6日	340m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
水内坐一元 神社遺跡	集落址	弥生 古墳	竪穴住居址 土壇 竪穴住居址 溝址	8軒 11基 3軒 3条	弥生土器 北陸系土器 土師器 畿内・東海・ 北陸系土器			

長野市の埋蔵文化財第80集

水内坐一元神社遺跡II

平成9年3月20日 印刷

平成9年3月25日 発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 鬼灯書籍株式会社